家庭雜誌

第貳拾貳號

生活の程度　高きに過ぎんよりは寧ろ低くかれ、古語に言す乎、入るを量て出るを制すと、

佛國革命の花　ローラン夫人の生涯は方に革命の激浪中に置かれたり、

伯父の家　田舎は我を迎へて無邪氣なる喜ひの聲を揚げり、可愛ゆき少女は我を迎へて優しき微笑を綻ばせり、

家庭と行政　無慘、彼女が家庭の幸福は彼の打破する所となれり、

躰中の音樂室　如何に精巧に裝置せられて耳があるよ、

一基の石　面に刻して彼女の貞潔在り、

少年は進出で大膽にも池の樣子を見て居りましたが頓て地上に跪き兩手を指上げて上帝の冥助を祈りましたがコノ祈禱を楯にいたし心丈夫になりまして直樣池へ躍入り一面に張詰めた池の氷の中央を打摧イて一條の道を通じ其如からモグリ込ンで氷の下になッて挽き苦しンで居る三人の小兒を一人ヅ、陸上へ引上げ少年は滿足致し嬉し氣に三人の小兒を打眺め寒氣に凍へて居る小兒等の身躰を温める抔種々世話致しましたが程なく小兒等は慈母達の手に交付されました

五才になる小兒の賢いヿ

茲に述べますお說話は兒心にも一片の孝心より己れの食慾を割きました然かもコノ孝行心は五才になる兒心より起りたるを想へば憐れにも亦最とゞ感ずべきのヿであります佛國ランヌ近傍に住ンで居る一人の僧侶さんが一日衣服の丈を取らせんとて極難澁をして居る檀家の許の三人の小兒を吾方に呼寄せましたが折から冬のヿでありましたが別けて此日は寒氣が嚴しイので三人の小兒はガタ〳〵慄へて居りましたが善イ坊さんは爐の傍に小兒等を呼近付けて温暖を取らせ而して麵麭と少許の牛肉を取寄せて三人の小兒に名々に分けて遣りましたが長の二人は甘まさうに舌皷ちして喫べて了ひましたが當年漸ッと五才になる三番目の小兒は嬉しさうに自分の分を眺めて居りましたが偖て手を付け樣とも致しません其處で坊さんは「オヤ〳〵坊ヤは喫べないのかい」小兒「ハイ喫べません坊は家

に病氣〳〵が悪るくッて寝ンねして居る阿母チャンに坊が頂イた麪麭と牛肉を持ッテ、進げるの」

斯く言ひ終りて小兒は涙ぐみました其時坊さんは小兒に向ひまして「坊の阿母チャンには別に進げるから坊はコレをお喫べよボン〳〵が空イてるだらうに」

小兒「ハイ坊はボン〳〵が空イてるけれど阿母チャンが病氣〳〵が悪るいから」坊さんは別に牛肉と麪麭を取出しまして「ム、左様か〳〵チャコノ麪麭と牛肉を進げるから阿母チャンに持ッてヽお進げよ其替り叔父さんが坊に進げたのをお喫べよ」小兒「チャ坊は麪麭丈け喫べて牛肉は阿母チャンのに取ッときます」

慈母の秘藏物

名高き羅馬の將官シピオンの娘コルチリー女は最も豪らい價値のある婦人でありましたが貴婦人達の集會の席にて相互に寶石だの裝飾品を見せ合ッて自慢して居りましたがコルチリー女に向ひまして「貴婦の寶石や裝飾品を拜見致し度うムいます」と申入れました其時コルチリー女は自分が注意て此上もなく大切に養育て居る自公の小兒を呼寄せ貴婦人達に引合はして「コレが妾の秘藏品でムいます裝飾品でムいます」と申しました

少女のマリー

今は昔十六世紀の頃のことでありましたが佛蘭西のウズールの街衢に通ずる道路をば遊

歩輕げに疾く行過ぎる十五才の少女が厶りましたが名をマリーと呼びましてコノ少女は近い内に村内て祭典が厶いますから其時着飾らうと豫て樂しみにして居ました衣類を少女が平素儉約して積溜めたお金で買はふと思ひ足を宙にして市街を指して參りましたが胸の裡は悦喜で一杯になッて居ります少女の綺麗な装飾に出合ッては少女の娘仲間の装飾は光輝を消されて仕舞ひましやう偖コノ少女は貧しき葡萄培養者の娘マリーで厶いましたが今しもマリーは娛しき幻想を胸の裡に畫きッヽ欣々として來懸る行方より身には襤褸を纏ひ涙堂には悲哀の露を湛えたる餘所の見る眼も憫れなる一人の老爺にハタと邂逅しましたがマリーは蓮歩を停め老爺の薄命な物語に耳を澄まして倶に貰ひ泣きを致しました少女は不憫なと云ふ心を起こしました少女は最早晴衣も不必要樣に思ひました一片の慈悲心は少女の狹い胸の裡に芽出して装飾の念に打勝ちました少女は自分の晴衣の代が這入ッて居る小さな巾着を老爺に與へました而して少女が施こしたる慈善の行爲は綺羅びやかなる晴衣を得たよりもマリーの身に取りて幸福である樣に感じ初めました

スタンスの學校の幼年生徒

德操と才幹とを以て音に名高きペスタロッヂは少年の敎育に一身を献げました時は丁度西歷紀元千七百九十九年の頃普魯西は瑞西を征服へんとて兵隊を差向け瑞西に攻入りましたので戰爭のために兩親には離れ世に親戚便りもなき貧兒等の一團躰をなせる瑞西の

小さき市なるスタンスの學校の管理方を擔任けて居りましたがコノ校舍は政府の補助と少年等の勞作則ち麗らかなる日には耒耜を把ッて菜園を耕し寒き冬の日には機を織り乃至は糸を紡ぎ拆し其收入高を以て校舍を維持ィで居りまして漸ッと今日を支へると云ふ極切詰めた生計を致して居りましたが折柄スタンスと隣合ッて居るアルトルフと云ふ小さな市が兵燹に罹りて滿市灰燼となッたとの飛報がムィました其時ペスタロジーは生徒を集め一同に向ッて申します樣「偖て諸君アルトルフの市は兵燹に罹り破壞されて了ひましたので着る着物もなく住ふ家もなく食ふ食物もなく路頭に彷徨ッて居る少年が夛分百名以上あると推察致しますそこで難儀して居る少年の中二十名丈私共の許へ引取らうと思ひますからコノ事件を政府へ請願しては如何ナものでしやう」と協議致しましたところ少年等は師の言葉を聽きまして異口同音に「然り然り」と答へました時にペスタロジーは少年等の言葉を遮ッて申します樣「併し諸君コノ事件に付ィては能く勘考へて御覽なさい目下私共の手許に在る資金は大層乏いのです而して新入生のために政府で補助金を殖して呉れる如何だか的になりません此樣ナ次第でありますからアルトルフの少年等を引取るとすれば諸君の生計を立て敎育を經續せんがためには勢ひ諸君は從來より一層の勞作を爲し恐らくは諸君は諸君の食物や衣服を割ィて新入生に與へねばなりますまい去れば若し諸君が諸君の調度を割くがために他日後悔する樣な恐れがあると懸念するならば寧ろ

アルトルフの少年等を引取らんと言はざる方宜ろしとて校長ベスタロッヂーは生徒に向ッて是等の障礙を幾度も反覆し自分の言ふところが少年等の腑に落ちたかと云ふことを確めるために諄々と說聞かせましたが少年等は其の優にやさしき决心を眞實籠めて貫かんといたし「アルトルフの少年等は私共の方に引取りましやう何に當方へ來ましても毫も故障はございません縱令校長の仰ッしやるが如き塲合に立至りましても毫も遺憾には存じませんせん私共は喜ンで私共の調度を割イて彼等と苦樂を倶に致しますと主張ましたがアルトルフの少年等は到頭スタンスの學校へ參ることになりましたが彼等は兩手を開イて迎へられ兄弟の樣に待遇はれました

十三歲の水兵

徃昔佛蘭西帝ナポレオン一世が向ふところ前なく旭日の勢を以て歐羅巴の諸洲を馬蹄に蹴散らしました頃のことでありましたが獨眼の將軍海上の覇王英吉利の水師提督ネルソンが佛蘭西の艦隊を埃及海に襲擊ち致しましたので佛の艦隊は散々に打惱まされました時に佛の海軍少將カザビヤンカの一子當年漸く十三才でありましたが父に從ひまして海軍少尉候補生の資格にて佛の軍艦東洋號に乘組ンで居りましたが風腥く血の雨を降らしましたる埃及海アブーキールにて苦戰の當日十三才の少年が大人にも眞似の出來ない健氣な振舞は一點の申分もございませんでした其勇ましきことと危急に臨ンで泰然として山の如

く動かざりしとは戰場に馴れたる老功の水兵等をして感涙を絞らせました
今戰爭の眞最中佛の軍艦東洋號は敵より射懸けたる砲彈のために不意に火を出し和江に鎬を削る最中にて消止めん手段もなく火は看る〳〵内に全艦に燃擴らんとする勢ひにて今は匆々に礮臺に在りて敵の矢表に立ッ兵士もなく只少年の隻影を甲板に認むるのみでありました「父上兒は佛國の國旗を汚すとなくして兒の守衛線を撤てるとが出來ますか」と少年は叫びました然るに少將カザビヤンは重傷を負ひ死に瀕ッて居りましたので吾兒の叫聲を聞取らん樣もありませんでしたが斯くとも知らぬ少年は吾音聲の父の皷膜に通じたるとと一圖に思ッて只管ら父の答を待ッて居りましたが頓て年老ひたる一人の水兵は少年の傍に馳來り「お悼しやお尊父樣には重傷を蒙り玉ひ最早御存命覺束なく依て若樣には私とゴ一緒に敵陣へ降り生命を存らへよと御尊父樣の御命令を蒙りまして伺ひましてムイます」と演べましたが之を聞くと等しく少年は狂氣の如くになり父の少將が氣息も奄々くにて仆れ臥したる一室へ驀地に走り行きヒタと父に取付イて絶入らんばかりに打歎き斷然として父の傍を去らざるべしと決心致しましたので疾く此處を立去りて難を遁れよとの父の懇請も命令も其詮がムイませんで可惜蕾の少年を救はんとせる老の諄言も其甲斐がムイませんでした「兒は死にます兒は父上と倶に死にます」と貴むべき少年は叫びました其時年老ひたる水兵は歎息致しまして「噫是非もなきとである最早一刻も猶豫する場合でな

く私は漸ッと一身を脱れるとが出來る位でムイます然らば是れにて御暇申し上ますと言ひて老の眼に涙を浮べて少將父子に訣別れたかと思ふ程もなく猛火は早くも火藥に移りましたので無慘にも佛の軍艦東洋號は己が五躰を以て父の五躰を庇ッて居りました少年の勇者を乘せたる儘百雷の一時に落ちたるが如く鳴渡る響と共に微塵に碎けましたコレぞ則ち年老ひたる水兵が歷山港に上陸せる後ち說出したる一場の物語でムイました



謹で新年を賀し併せて世の子宮病血の道にて御困りの御婦人方に告ぐ

何故に中將湯は婦人藥の王なりとの世評を得たるや未だ其譯を知らぬ方は一度買て御ためしあれ近頃大評判の中將湯は効能の的面なると驚く計りにて◎子宮病血の道にて年久しく病ふ人。年頃になりて月經のなき人月經不順又は産後の古血にて煩ふ人。息ぎれ動氣強く。背より肩首筋へこり上せ耳鳴り目かすみ頭痛甚だしき人。しらち。ながち。つはり。疝癪抔にて久しく病ふ難病も少し飲み續けば治らぬといふことなく軽きは一廻位にて必ず其効を表はすべし早く試みよ

産科婦人科專門
諸大醫有効保證
商標
ちゅうじゃうたう
中將湯
子宮病血の道藥

半日分 四錢(郵二錢)
一日分 七錢(郵二錢)
三日分 廿錢(税二錢)
一廻分四十五錢(税四錢)

◎中將湯は大服ゆゑ直段は割合に安し
◎東京市内は御注文次第即時配達し(葉書返濟)
◎遠國御注文爲替は東京郵便局へ
◎請賣販賣者には種々の利益あり申込を乞

産科婦人科專門 櫻井病院長醫學士 櫻井郁二郎先生(東京)

産科婦人科專門 獨國醫學博士 佐伯理一郎先生(京都)

産科婦人科專門 獨國醫學博士 緒方正清先生(大阪)

此外四拾餘名の大醫の證明は能書に詳なり◎中將湯が尋常賣藥に勝る所は此點にあり

中將湯本家 東京日本橋通四丁目 津村順天堂

代理店 横濱吉田町二丁目 永井永進堂 大阪特約店 大阪新齋橋博勞町 高橋盛大堂

販賣所は東京にて同盟會朴訥會信友會を始め至る所にあり地方にては大阪有名賣藥問屋を始め府縣小都會にて有名なる賣藥屋は請賣致居候間最寄に御求あれ取次なき地は至急御申込被下度本舗は此際非常の熱心を以て販路を擴張せんとす

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行(電話十八番)

明治廿五年九月十四日遞信省認可

家庭雜誌

第貳拾貳號

政界革新 解散と總撰擧

定價十錢 郵税二錢

五十部以上一纏め購求の諸君へは特別大割引す

解散は突として來れり何故の解散乎政府は第五議會を以て國民の意志を代表せずとして解散せし乎解散果して正當の理由を有せる乎國民は須らく之を知らざる可からず否是非共知るを要す

政府對民間黨の關係は隱々の裏に局面を一變せり然り新吏黨なる一團塊は俄かに成立せり國民は須らく第四議會以來の政界畧歷を知らざる可からず否是非共知るを要す

第五議會の批判は黑白紛出天下將さに彼等の口舌に迷はんとす然り迷はさるゝものあらんとす國民は須らく第五議會の經過を知らざる可からず否是非共知るを要す曰く官紀振肅曰く星議長問題曰く千島艦事件曰く條約履行案曰く公約履行

自由黨の近狀を詳にするは撰擧民の最も必要とする所ろ何となれば彼れは新吏黨なり故に彼れは撰擧場裏民黨正面の敵たる可ければ

民黨の政綱を讀むものは表裏隱顯の政界に立ちて毅然として動かず或はざるの識見を得るを要す然り民黨の政綱は純民黨運動の大主腦を說明して餘さゝれば也

如何なる代議士を撰擇すべき乎撰擧人の知る可きは此事也然り國民は眞に此事を知るを要す

（以上黑圈を附せし丈けの目錄を有する本書を全國の撰擧者就中演說者諸君に推選すること然り）

發行所 民友社

電話七十番

東京市京橋區日吉町四番地

山路彌吉著

十二文豪第六卷

新井白石

定價十八錢
郵稅四錢

猶ほ以後出版の書名幷に著者人名は左の如し

『エマルソン』……北村門太郎
『トルストイ』……德富健次郎
『頼山陽』……德富猪一郎
『近松巢林子』……塚越芳太郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『ユーゴー』……人見一太郎

毎月出版

平民叢書

毎月一回發兌
十冊完結
紙數百五十頁

平民叢書第一卷

十九世紀之大勢

定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第二卷

世界經濟上之變動

定價拾貳錢
郵稅貳錢

平民叢書第三卷

國家と政府

定價拾貳錢
郵稅貳錢

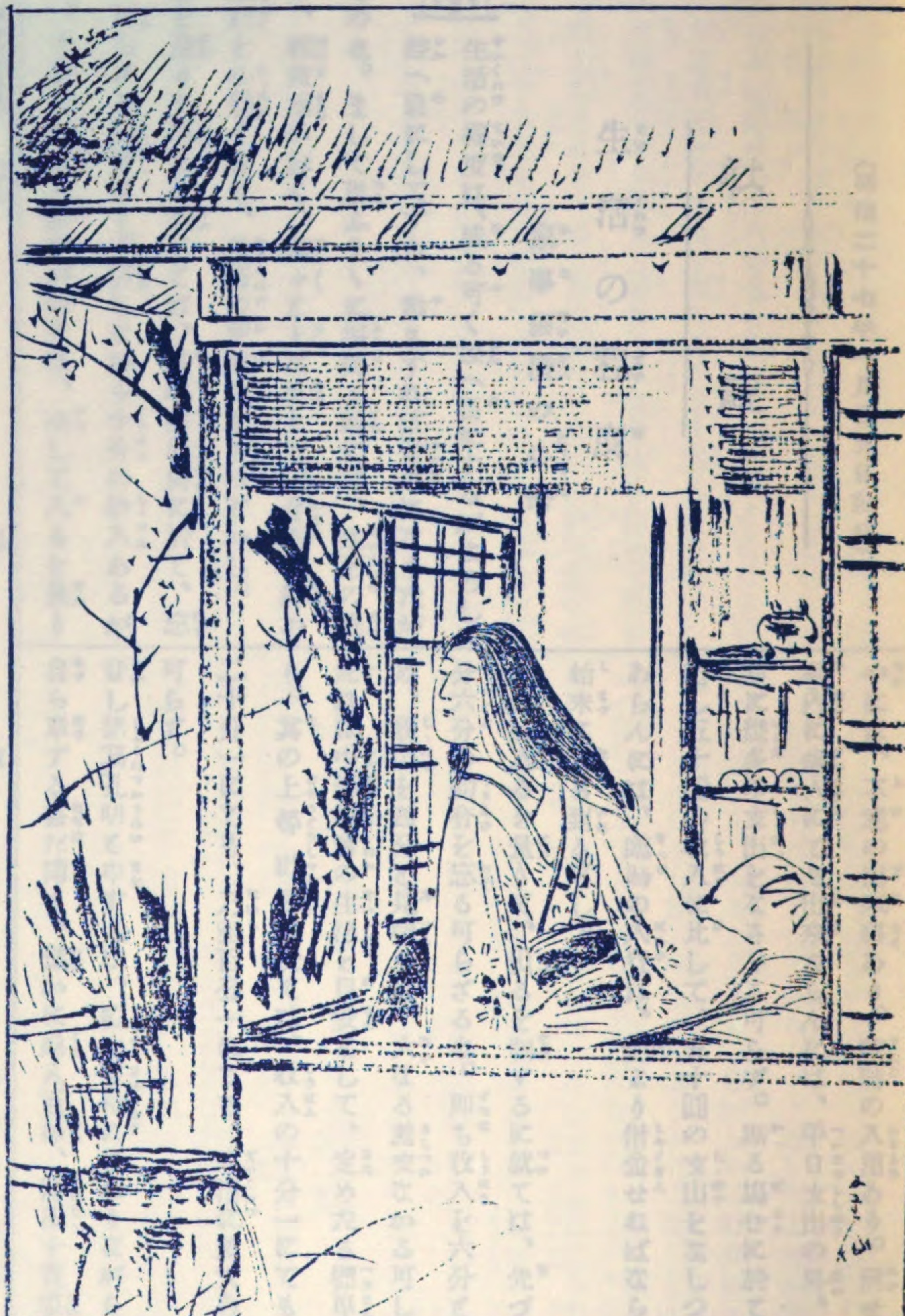
平民叢書第四卷

教育と遺傳

定價拾貳錢
郵稅貳錢

明治二十七年一月廿五日發行
家庭雜誌第貳拾貳號

目錄



家庭雜誌第貳拾貳號
（明治二十七年一月廿五日發兌）

社說

生活の程度

家事經濟の心得

生活の程度は、成る可く控へ目にするがよろし。控へ目にしてすら、動もすれば贅澤になりたがるもの也。まして思ふまゝに振舞ふ時には、生活の程度は、輕氣球の如く、漸々と上に昇りて、今更ら猝かに倹約を心懸くるも、後悔の甲斐なきものぞかし。入るを量りて出るを制すとは、家事經濟向に於て、忘る丶可らざる訓言なり。併しながら十分の收入あるが故に、十分の支出を做すが如きは、決して入るを量りて、出るを制すとは、謂ひ難きなり。何となれば世の中には、不意の出來事あり。臨時の入用あり。例せば家內に病人にても出來たらんには、平日支出の外、更らに幾多の支出をなさゞる可らず。斯る塲合に於て、若し五十圓の收入に比して、五十圓の支出をなしつゝあらんには、臨時の入費は、他より借金せねばならぬ始末に立ち到る可し。

されば入るを量りて、出るを制するに就ては、先づ四分六分の釣合を忘る可らざる也。即ち收入を六分と定め、收出を四分と見積らば、大なる差支なかる可し。此れは中等社會の生活を目安として、定めたる標準なり。其の上等社會に於ては、收入の十分一にても、二十分一にても、乃至百分一にても、生活に差支ある可らず。

昔し諸葛孔明と申す人は、蜀の宰相にてありながら、自ら奉ずる甚だ薄く、僅かに桑八百株、薄田十五頃、

子孫の衣食、自から餘裕ありと云へり。斯く生活の儉約、簡易にしてこそ、國家の爲めに、大なる忠義を盡すヿをも出來るなれ。今日にても上等社會の人達は、何卒孔明の心得あり度きなり。左すれば彼の世間に八ヶ間敷賄賂の沙汰抔は、夢にだもある筈はなきにあらずや。

人は衣食せんが爲めに、生存するにあらず。生存せんが爲めに、衣食するものなり。然るに漫りに生活の程度を高ふし、美衣美食、贅澤、驕奢を事とする時に於ては、總ての力らも、總ての目的も、唯だ此れが爲めに擲たねばならぬ次第となる可し。若し斯る場合とならば、人は生存せんが爲めに、衣食するにあらずして、衣食せんが爲めに生存するもの也。

人間獨立の第一は、衣食の獨立より先なるはなし。然れども漫に生活の度を高ふする時には、勢ひ衣食の獨立を失はねばならぬ理合となる。何となれば我が普通の收入より不平均なる暮しをなさんとするには、勢ひその不平均を埋め合はする爲めに、他より收入するの必要あれば也。官吏をなして、今更ら止めたしと思ふも、止むる能はざるは、若し官吏の俸給を抛つ時には、到底今日通りの暮しを做す能はざるが爲にあらずや。その他總て人々の心にもなき事を、厭と思ひつゝも、我が獨立の精神を賣りて爲しつゝあるは、唯だ斯の弱味あるが爲めにあらずや。切に云へば世間には、金時計の爲めに、黑漆人車に乘せんか爲めに、細君の頭髮に、珊瑚珠を飾らんが爲めに、その指に金剛石の指環を挿まんが爲めに、其の食膳に葡萄の美酒を斟まんが爲めに、其の獨立を賣るものあり、或は其の貞心さへも切賣するものあり。

その本亂れて末治まるものあらず、要するに是れ知らず識らず生活の度を高め、進退維れ谷まりて、斯く墮落するものぞかし。

されは生活の程度は、低けれは低き程、衣食の獨立を得るの安全は、愈〻加はる可し。故に成る可く中庸を失ふなからんとを欲すれども、若し何れを取らんかと云へば、寧ろ低きに過きる積りにてあるとこそよけれ。特に自から奉する一點に於て最も然りと爲す。抑も一家生活の全權は、擧けて妻君の手にあり、高くするも、低くするも、一に主婦たるものゝ手心手加減にあり。若し已れか情の動くまゝに、勝手次第なる贅澤を恣にし、爲めに夫婿の身躰は、その獨立を失ひ、泣く〳〵も妻子の機嫌を取らんか爲めに、其の身を束縛せられ、甚しきは其の耳心さへも切賣せねばならぬに立ち到ると、世間其の例甚た尠なからす。世の主婦達は、能く此邊に心を用ひ、一寸日常の買物をするにも、此れは餘り驕奢に失せぬか、贅澤にあらぬか、若しくは一家生活の程度に比して、不相應にあらすやと、篤と熟考す可き也。

さりとて吾人は身分不相應なる儉約をなし、鄙吝に流れ、爲す可き義理も爲さす、盡す可き人情も盡さす、唯た守金奴となれと云ふにあらす。過きたるは尚ほ及はさるか如し。高きも低きも、自からその程度あり。四分六分の釣合、決して忘る可らさる也。而して其の釣合の加減を過らさるは、主婦たるものゝ第一の能事也。

史談

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）四

千七百九十一年二月、里昂市より財政困難扶助の請願を國會になすことあり、ローラン其委員に撰まれ、夫人と共に巴里に赴き滯ふること七ケ月。

彼等の旅館は直ちに志士集會の場所となりぬ。友人ブ

リツソオはビチオン、ブソオ、ロベスピール以下數多の同志を連れ來つて彼等に紹介し、斯くて革命派の同志は一週四回ローラン夫人の旅宿に集會せり。ローラン夫人此間に處して如何の擧動をかなせる。夫人口ら記して曰く、余は女性相當の本分を知り、決して之を忘れざりき、集會は常に余が面前に於て開かれたり、然れども余は之に加はらざりき、加はらすと雖ども余は一語も聞き落さず、而して時々は吾思ふ所を言はんとしては自から制して舌を嚙むことありき」と。見よ、時正に艱にして一群の俊英卓を圍んで慨然邦家の前途を談ずる後ろの方、引離れて据へたる一脚の椅子に倚れる古羅馬の肖像を見る如き一婦人、眼閃き眉擧り口しば〳〵言はんとしては唇を嚙むの狀、咄々眼前に閃き來るを。然れどもローラン夫人の精神と其一身の魔力を以てして焉ぞ男子を動かさゞるを得むや。夫人自から制して口を噤めりと雖ども、革命派の諸士は何時しか隱然其勢力の下に落ちぬ。

巴里滯留の七ケ月間、ローラン夫人は革命派の諸名士と相識り、同胞會に加はり、ジヤコビン俱樂部の演説を聞き、國會を傍聽し、而して轉た革命の足步遲々として捗取ざるを憾みぬ。夫人ブリツソオに書を與へて曰く、寛洪なるブルタスよ、卿が筆を火中に投じ、去て野に蒭蕘を作れ、國會は今や腐敗と壓制の團塊のみ、内亂最早凶事にあらず、内亂或は我等を甦生せしめん、然らすんば我等を亡ぼさん、内亂なければ自由滅ぶ、我等は内亂を恐るゝを要せず、避るを要せず」と。左れば單純急進なるローラン夫人は國會を因循なりとして再び國會傍聽に來ずと憤然として傍聽席を去り、新憲法も厭しく、此年六月路易十六世の竊かに佛國より逃げ去らむとして捕はれて再び巴里に連れ歸らるゝや、ローラン夫人は是れ却て不幸なり路易去て内亂起らば國民は茲に革新の路に入る可かりしにと慨歎し、

激烈なるマラァの民朋新聞をば巡査の差押さふるを慣り、人民の早や革命の進歩に倦み疲れたるが如きを見ては「我等は今一度革命を要す、然れども人民に其氣力ある可きや、余は之を疑ふ」と歎息せり。蓋しローラン夫人の眼中には唯共和の二字ありしのみ、共和は路易と兩立せず、貴族と兩立せず、已むなくんば內亂一揆の荊棘を通りても一直線に共和に達せずんば已まざるの覺悟なりき。斯くて夫人は此年九月革命の捗取らざるに怏々としつゝ夫と共に里昂に歸り去れり、歸る途すがらロベスピールの革命宣言書を撒き散らしつゝ。

ローラン夫妻里昂に歸りし月の末、國會は解散せられ、七百四十五名の新議員より成れる立　法　議　會開かれたり。而して此時を以て製造所監督官の職廢せられ、ローランも今や文筆の業を專門とす可きことゝなり、即ち此年十二月を以て一家を擧げて巴里に轉じ、居をルー、ド、ラ、ハアプ街にトしぬ。彼等が巴里に來ると齊しく、舊友集まり、新知來り、其家は亦革命派の倶樂部の如くなれり。

時は恰も共和の雛まさに王政の殼を破り出んとして、甚だ艱むの秋なりき。此時に當り佛國を運轉す可き立法議會はまさに三派に分れたり。平原黨、此は議場に於て平坦の坐席を占むるが故に斯稱あり、是れ寧ろ平凡黨とも云ふ可きもの。山嶽黨、即ち極左急激派にして議場の高席を占るを以て此稱あり、ロベスピール、ダントン、マラァ等頓て巴里に血の川を漲らしたる輩其中心たり。第三に來るは其黨派の多くヂロンド區より撰出されたるが爲めにヂロンヂストと稱せられたる一派。此一派は當時三黨の首位を占め、ブリッソオ、ブソオ、ルーガエー、の輩を初として一黨多くは三十以下の俊秀より成り、渠等は大率プルタアクの英雄傳、シセロ、婁騒、近くは米國獨立によつて其理想を燃し

起せし者、日常往復の書簡にも相呼ぶにプルタス、シセロ等希臘羅馬共和時代の人物の名稱を以てし、雄辨にして學識あり、行正しく理想高く、大膽にして直往敢爲の勇あるも、實地の經綸措置に短き愛國者なりき。而して此年少氣鋭志高にして術疎なるヂロンヂストの一黨に連なつて恰も竹外一枝寒風に咲ふ梅花の如く、其直往勇進寸毫も假借せざる一徹の精神を以て、其白大理石の如き皓潔の人品を以て、其燃ふるが如き理想の熱火を以て、其一身の魔力を以て、之を鼓舞し、之を鼓吹したる者は實にローラン夫人其人なりき。

婦人の勢力なき邦なし、佛國を最とす、ローラン夫人の如き實に其一例なり。ローラン夫人は美人にあらざりき、其家の言傳によれば、寧ろ短矮肥滿にして衣裳裝飾などに少しも注意せざりしと云へり。然も其眼、髮、頭は甚だ美にして血色頗る鮮なりし爲め、四十近ふなりて奇妙にも猶二十左右の面影あり、加ふるに其音聲銀鈴を鳴らすが如く少しく震ひて尤もよく人を動かし、殊に談話に到つては、曾て人あり夫人を評して夫人の年配と其美人とも云ふ可からざる容貌を以て何そ斯く多くの渴仰者を有するやと訝れるに夫人之を聞ひて、彼れ未だ余が談話をなすを聞きしことなければなり」と言へる程、に妙を得たりき。況んや殉國の勇と、男子を恥ぢしむるの意志、一直線に共和に達せずんば已まざるの精神、羅馬希臘の昔に赫々の光を放つたる名婦人をも凌かんずる氣宇は、熱血となりて此皓潔の軀に跳るをや。ヂロンヂストの將歴隱然ローラン夫人の手に落つること、蓋し已む可からざるなり。

左る程に内外の形勢ます／＼危殆に迫りければ、王政の敗屋に殘喘を繋げる王路易十六世は其因循なる大臣を免じてヂロンヂストの指揮に從ひ新大臣を任命することゝなり、ブリッソオ等は此時を以て兼ねて知友の間柄なる老練誠實なるローランを薦めて内務大臣の職

に就しめたり。時に千七百九十二年三月、ローラン夫妻は命を受けて即日内務大臣の官邸に引移れり。盛裝嚴式をのみ見なれたる内廷の式部官は、新内務大臣が平服丸帽紐もて靴を縛して熟懇の友を訪ふ如くして王の前に入り來れるに、喫驚措く所を知らざりき。

ローラン夫人は、今や將に傾かんとする路易朝最後の嘗て地方小商務官の妻として半ば良人の勞を分ちたる内務大臣の妻となりて、一層其力をふるひたり。ローラン夫人のサロンはヂロンヂスト黨の集會所となり、此黨派の集會と良人の職務の外は、ローラン夫人は更に人を訪はず人を招かず、各大臣各代議士諸名士を招く度々の晩餐にも決して婦人をば招かざりき、國步艱難の秋、また男女相嬉戲するの餘裕あるを容さゞればなり。ローランの其同僚諸大臣と事を計議するや、必らずローラン夫人の前に於てせり。内務大臣の案上に山積する重要の書類を一々撿し去て、此は斯くせよ彼は斯うせよと一々秘書官に差圖を傳へ、自から筆を執て無數の文案を認め、議會及閣議に提出す可き報告書を草し、政府の爲めに出刊する新聞の方針を監督指揮するは、實にローラン夫人の事業なりき。新内閣の動力となりて、層一層共和の理想に近かんとせる者は實にローラン夫人なりき。佛國内務大臣の金印はローラン實に之を帶びたりと雖ども、帷幄の實權は確かに此紅顏宰相の手に握られたり。

ローラン夫人以爲らく、改革は決して朝廷との一致により出來可きものにあらず」と。故に他人は時に路易を信ずるも、夫人は決して之を信ぜず、曰く、余は專制の下に生れ專制によつて立ち專制に馴れ熟したる王の立憲的使命を信ずる能はず」と。ローラン初めて大臣となり路易を見て之を喜び欣々として御前會議に赴くや、ローラン夫人は夫に向て云へり「御身の其通り爲し玉ふ時は、常に愚かなる事を爲し玉ふ時なり」と。

而して彼れ若し夫人の要求せる丈爲し得ずして内閣より歸れば、ローラン夫人は内閣は酒店にして大臣は王の木偶に過ぎずと罵れり。夫人は王を疑ひ、而して何人にても貴族黨に緣故ある者を疑ひ、内閣の尤も巧練なる外交家チユモーリツツが其友人を引いてローラン夫人に面會するや、夫人は人に語て曰く、彼の好男子豎はマヅキ愛國者なる樣に思はる、彼等は國家よりも寧ろ己を重しとす、余は彼等が誇る所の技倆をば殊更に見ざるふりして彼等の自惚を打破し呉れむとの誘惑を逃るゝ能はず」と。

斯くの如くローラン夫人は其夫を驅り他の諸大臣を驅り更にヂロンヂスト全黨を刺衝して、次第に王路易との間を遠ざからしめ、「チユモーリツツの云へる如く「針の先もて次第に王を刺し殺し初め」たり。六月に到りて内閣と王との間巳に衝突の頂に達しぬ。是れより先き墺地利に對する開戰の布告は巳に四月を以て出で、戰利あらずして人心洶々たり、而して國内には新憲法順守の宣誓を爲すを肯ぜざる僧侶數多ありて、事愈々紛々たらんとするを以て、内閣は一、巴里の各區より二萬の兵を募り内外の敵を禦ぎて巴里を保護し、二、憲法に從はざる僧侶を盡く國外に放逐するの策を立てたり。王路易之を肯んぜず。ローラン夫人は此方案の行はるゝと行はれざるとによつて向後ヂロンヂスト黨の朝廷に對する嚮背を定む可しとの決心なりければ、夫ローランに向ひ内閣は宜しく一通の奏書を王に進め國家の安全は實に此方案の施行に存すれば王若し斷じて之を否裁あらば閣臣一同辭職す可き旨奏上す可しと勸說し、夫人自から筆を取りて一篇の上疏を認めたり。文字精勁、理義明白、佛國古來歷史上の文書に於て尤も著しきもの丶一は是れなり。ローラン夫人の上疏は内閣の議に上りぬ。内閣は流石に之に調印し兼ねたり。於是ローラン夫人は夫に勸めてローラン一個の名を以

て王に進めしむ。書奏す、時に六月十一日。十三日にはローラン已に諭旨免官の辭令を握りぬ。

文藝

伯父の家

嵯峨のや主人

私が伯父樣に伴られて其故鄕へ往たのは、恰度秋も季、田舍は早稻田苅乾す忙しい頃でありました。伯父樣のお家は如何樣家であらう歟？其お家では父樣が生聲をおあげになり、其里には父樣の幼時を知て居る人も澤山にあり、其村には父樣の幼年を圍んで居た木や家も澤山にある、其家、其村、其鄕は、抑如何樣であらう歟？是から自分も其家へ往くが、恰度父樣の穉かつた時の樣に又其鄕の爲めに迎へられるであらう歟？是が私の道すがらの思ひ、而して小さな頭に兼て父樣より聞て居た話を土臺にして、村の有樣を畫て見ました。伯父樣のお家は、信濃の國奈良井驛より、半里餘り北、山根村といふ所にあるのです。如何なる緣由有て歟世々此里の鄕士で、然も富有一村を傾けて其名四隣に鳴響て居ります。今の主人山根丈左衞門といふは、即ち私の伯父で、丈の高い立派な人です。色は少し淺黑いが、鼻筋の通ッた、口元の締ッた、男らしい貌の、然も目は黑目勝で大きく、俗にいふ團十郎目といふのでした、頭は少し禿て藥鑵の樣に光ては居るが、其が瑕にはならず、長者の風が備ッて、居るとて人が尊敬を加はへる源でした。唯一ッ可笑のは、話が笑壺にでも入る時は、ヘン畜郎次と言ては其藥鑵をびしやりと打つのがお癖でした。私は小兒心にも、何故伯父樣は彼樣に藥鑵をお打なさるの歟？又何故ヘン畜郎次といふ事を被仰るの歟と思ッて考へた事も有ました。が其はとんと大壯な神秘にでも屬する樣に、如何

しても分りませんでした。まだ其頃は滊車のなき頃とて、途中は無論車で其に海道は久しぶりの事なれば、諸所を見物しながら往とて、ゆる〳〵旅する事となりました。一行は伯父と私と僕五助の三人で、先づ高崎前橋から伊香霧積の温泉へも遊びましたが、此邊は曾て父樣に伴られて遊びに來た事も有た所、覺えず其時の事思ひ出して、父樣の戀しさ今更の樣に身に染て四方眺むれば、木草は枯果て風に靡く秋野の薄物寂しく、覺えず涙を浮めるのを、伯父樣に諫められて幾夜の旅衣を重ね、東京を立てより廿日餘といふ日の暮方山根の鄕へ着ました、此邊は山亦山、丘亦丘と連なッて波濤の如く、其間々に村と田畑が有るのです。夕暮の事なれば四方の山々と暮煙に霞んで其景色の美しさ、鳥非峠の彼方に沈んだ太陽が、雲の閉目から金色の光を東山の頂に投る、其を東山が四下の田畑に投返すと、其を更に夕霧が漂はせて、夢を結ばせやうとして居ます。西山の麓などは早薄暗くなッて、村の藁葺家根からしめやかに立昇る煙の、空に棚引く樣も哀に、村も眠に就くの歟と思はれ、又苅入れた稻を堆く積のせた車が、彼道の小徑をきしらせて往くと、其後から四五人の童が何を歟叫びながら走てゆくなど、誠に秋の景色でした。車が椎の幾株歟繁る下を通り抜て、小さな堤へ昇ッた時、向ふを見ると、北山の麓に石垣少し積重ねて白壁の屛を折廻らした立派な家が目に這入ました。私は彼が伯父の家ではない歟と思ッたが果して其でした。車が門前に着た時見れば、石垣の下には小川の水が石を洗て湲々と流れ、衡門の前には欄干の有る橋が渡して有ます。門を這入てからも重家迄は殆んど一町も有ませう歟？右側にはいろは附の倉庫が幾つともなく並んで居て、其前には多くの人が筵を取入れたり、俵を運び入れたり、高箒で掃除したり、わい〳〵忙しさうに働て居りました、左には一棟の水

車が有て、四六時中休みの無き車は、一ッ調子に廻はッて眠むくなる樣な音を立て居ました。又馬小屋には幾頭數の馬が飼料に飽きて高嘶をしたり、又は鼻嵐を立たりして居ました、玄關の横に雌雄の大きな日本犬と、木曾路特産の小さな、然し如何にも怜悧さうな如何にも丈夫さうな獵犬二三疋遊んで居たが、主人の姿を見るや否や、人より先に飛んで來たが、件の大犬は人の後よりのそり〳〵と歩て來て、私の踵を嗅で居ました、そんと私が如何なる種類に屬する人なる歟を嗅分やうとする歟の如く。我々と多くの男をんなに無邪氣なる微笑と、喜びの聲とを以て迎へられました。彼等の中には私を見て莞爾々々物好さうに微笑て居るのも有れば、又何事を歟叫くものも有ました。此多の人の中に、私は忽ち五歳斗の可愛らしい女の兒と、十二三になる美しい少女とを見附ました。是は私の從姉妹で、年上のをお霜樣と云ひ、年下のをお露樣と云ッて、孰れも伯父の愛子です、二人は四十斗の人品よき婦人、即ち伯父樣のつれ合ひなる伯母樣の背から、私の貌をさし覗きながら、やさしい微笑を綻ばせて居ました。伯母樣は機嫌よそに私の貌をちらりと見て、伯父樣にお歸り遊ばせと申しあげ、又私の方を見て、久雄樣でせうね、大壯大きくお成なサッた事、何時ぞや私があがッた時にはまだよう〳〵よち〳〵歩く位でしたに、と云ひながら末の子を顧りみて、露樣久雄樣が來たから宜からうね、之からは一所に遊んでお貰ひなさいよ、さあ奥へお出なさい、と私の手を牽て奥坐敷へ伴てゆきました。お露樣もお霜樣も始の中は、何だ歟耻しさうにしてお居でゝしたが、直に打解て此方へ來て御覽なさい、と私を自分達の室へ伴ゆき、絵など引出して見せてくれました。此夜から私は伯父樣の家に居る事となりました。翌朝目が覺た時お露樣の乳母の小夜といふのが來て、もう目が

覺ました歟？衣服は此方のを御着なさいまし。此お室が今日から郎君や露樣のお室ですから、中よくしなくては不可ませんよ。さあ郎君のお翫具も來て居ますから、此方へ持て來て置きましたよ。衣服は着られます歟？是はお利口だなど、お露樣を取扱ふ樣に大きな私をも取扱て居ました。衣服を着改てしまふと、さあお貌を洗てあげますから此方へ入らッしやいまし、と椽側を幾つも〳〵折廻ッて臺所口へ出ましたが、其間一町も有ましたらう歟？其處には縦二間、横一間程の大きな木作の水溜が有て、樋で呼ばれる裏山の清水は、蕭々と流れて來て滿々と湛へられ、更に溢れて溜下の小溝へ流れ落ち、砂の玉を磨いて又更に庭の池へ流れ込んで居ます。水溜の前には大きな流しが二ッ有て、物を洗ふ便に備へて有ます。乳母は此處で立止り、さあお貌を洗ひませうね、と言て金盥へ水を汲み、うがい茶碗へ水を汲み入れて、さあぐづ〳〵をなさいまし、お口に熱を持つと臭くなりますからと言ひます。て私は乳母のいふなりになり、ぐつ〳〵もして仕舞ひ、貌も洗て仕舞て、其から其邊を見ます、と見る物皆目新しい山里の有樣です。裏山はさのみ高くもないが、當家の地所なれば心の儘に手を入れて畫にある樣な眺、頂上には杉の一村繁る中、稲荷の祠が有て木蔭から鳥居が覗て居ます。又下より十四五間も登つた所、松の幾本歟崖より枝をさし出した下に、藁家根の庵室が見える、が是はつい一昨年まで御繁昌で有ッたお祖父樣が此處にお籠で、觀經三昧に世をお送りの三昧堂です。三昧堂の下には一面に、梅紅葉、躑躅、海棠など取交て植てあるが、其陰より手すりの幾曲崖鼻に見えるのは、堂まで通ふ小徑でせう歟？少さな蜀の棧道歟とも見えて春秋の眺め想ひやられます。庭には大きな池が有て、山より落つる自然の瀧は巖を叩き石を洗て此中へ流れ込むが、其周圍には藤棚を結び渡したれば眺涼

しく、春秋の木草いろ〳〵を程よく植並べた作、慥に都より庭作を呼び寄せて造らせたもので有ませう。又池の中央には小さな島が有るが、之には芝を一面に匈せ、虫食の木の橋を渡し、而して島には形而白き五輪の塔を立て、古風な六角堂を据た具合、如何にも好奇を盡した庭の様です、私は一目此風景を見やりて、扨も伯父様のお家は大したお廣い事哉、此様大きな家にお住居ではお金なども澤山有る事で有らう、其に引替て父様は、生涯貧しくお暮らしで有たが、其でも伯父様の元へ金のむしんなどを言ておやりの事は、唯の一度も無ッた御様子、想へば父様はえらい御方哉、と其正しい御氣質を思ふに附け、有し昔の忍ばれて父様の戀しさなつかしさ、然し如何程戀へばとて慕へばとて、幽冥世を異にしては、其戀しいお姿ももう見る事は出來ず、怨めしい世の中だ。當歳にして母に離れ、八歳にして父に先だゝれた此孤子、斯る立派な伯父様のお世話になる事、世に有難くなくもないが、然し貧しくとも父母の膝下にあるにまさらう歟、あゝ懐かしい父様や！と覺えず涙を浮めたのを、小夜に見咎められて、恥かしく、急いで我室へかけ戻りました。

（終）

樫及び葦

すみれ

箱根山中葦の湖の邊に一本の樫の大樹がありました、枝は左右に擴がりて陰日光をかくし、頭は天を摩して湖水に映る富士の姿を蔽ふ斗、眞に稀有の大樹です。ある日樫樹傲然として湖中の葦を顧みていふには、これ葦殿手前は何と哀な奴ではない歟、僅の風にも臆き恐れてそよ〳〵と周章狼狽するし、小さな雀の一疋止まッてももう倒れて臥てしまふが、實に意氣地のない事だ。予を見よ、如何なる強い風が吹うと、如何なる

激しい雨が降らうと、自若として之を嘲り、千有餘年の間雨露霜雪に打勝て、壽を芙蓉峯頭の積雪と共に爭て居る、何とえらうからう？と其廣言未だ終らぬ中、富士の根嵐吹來りて烈風土砂を捲く事、忽ち大嵐となりました。水邊の葦は風が暴出すや否や、忽ち身を臥て倒れてしまひました。之を見ると樫木は傲然として嘲笑ひ、あゝ葦奴もう倒て仕舞ひ居ッた、弱い奴哉、予を見よ。此位な嵐なぞは平氣の平左だから、と拳を握ッて威張て居ました。風伯之を聞て憎き樫樹の大言哉、よし其儀ならばと風袋の口を大に開けば、何條以てたまるべき、さしも豪氣の樫樹も根よりゆさ〳〵と搖れる歟と思ふ、と山河も碎くる物音してばッたり横樣に倒れて仕舞ひました。暫くして雨やみ、風收り、日うらゝかに輝き渡りました。すると今迄臥て居た葦は皆一度に頭を擧て、靜な風にさゝやきさゝやき好天氣を樂しみ始めました、然し傲慢なる樫樹は再び頭を擧る事は有ませんでした。

家庭と行政

筑峰女史

四隣寂寞として草木も眠る丑みつ過ぎさしも賑ふ魯都「セントピータースボルグ」人の行來も音絶えてそよ吹く風の聲もなき爰にゆたけき家とも思はれざるに此の家の軒下夜目にはしかとわかねとも眞黒なる動物は犬か將た又人間かかしこに二ッこゝに三ッ尚ほも奇怪の愈増すは折々「サアベル」の舗石にふるゝ如き音の聞ゆるなりけり此の動物等今までは匍匐してありけるが立上りたる所にて初めて人間なる事判然せり此の人々はやがて戸際に身をすりよせ内の樣子を伺ひつゝさゝやき合ひ何か謀し合はするものゝ如し内一人の頭立ちたる者今までの忍びの擧動に引替ひて嚴然たる身構ひを裝ひ聲高く戸口に向ひ此所明けよとさけびしは云わ

ずとしるき警吏なり内にはかくと白髮の老父寢耳に水の夢さめて何事ならんと立出て夫とは知らず明くる間も御用と一聲警部を先に三四の巡査は一時にばら〳〵と亂入し情け用捨もあらばこそ物をも云はで老父になわをかけにける老父は不意のいましめに大方ならず驚きしが警部は兼て知る人の事にもあればヒタスラに是れには深き仔細ぞあらん事のあらまし聞かせよといへどこなたは耳にもかけず御用は此の家の娘にあり娘を出せ疾く起せ否なまば是非なく家の內隅なく搜索いたすべしと云へど老父は首打振り娘に限りて恐多き罪科犯すものでなし人違ひならんと承引せねばシヤめんどうなりと一目算に躍り上るを老父は驚きかつは立腹し警官とはいへ我れにとりて城廓とも云ふべき家內に蹈みこみこのろうぜきは如何な事たとひ娘に嫌疑有ればとてことわりも無く婦人の寢所へ猥りに入るとは職權濫用慘酷不禮餘りと云へだ解し難しイッカナやらぬ

と立上るを面倒なりと巡査等は蹈倒しつゝ無理無法にも二階に上り娘が部屋と覺しき戸口御用あり早こゝ明けよと呼ばはつたり娘は未だ十八九眠け盛りの其上に家事萬端忙しく晝の勞れに熟睡しいかなる夢路やたどるらん答なければ警吏はいらたち錠前ねぢ切りとび入つたり此の物音に夢さめて娘は一旦驚きしが嚴然威儀を正しそも婦人の寢室夜中と云ひ承諾もなく入り來るは怪しかる擧動不屆きなり疾く出て行きね早くされ何か欲しき物あらば勝手に持ち行けこの部屋は寢室なれは何にもなしと云へどこなたは荒くれ男禮儀も道理もあらばこそ汝に嫌疑のある上は中々油斷は出來難し衣服替なと欺きて遁れ出ださんも知れ難し猶豫は出來ぬ虛無黨の隱謀擧げてあり躰に白狀せよと右左より問ひ責むれど娘は左樣な大それた罪科身には露ほど覺えなし汝等か望みは外に有ならん唯だ疾く寢室を出て行きねと言葉銳く云ひ放てば警吏等は怒りの眼見開きて

ダマレ汝が白状せずば家宅捜索に着手して證據物件取出さんその時後悔するなよと櫛箱箪司の用捨なくあたるにまかせ手にかけ足に蹈みとばし品は四方に散亂し一々探せとこわいかに更に手がゝりともなるべきものは更になかりしがいと小さなる手文庫のふた明けんとせしを見るよりも今まで不思議の顔色にて傍觀してありし娘はあわて驚きとびかゝり中なる一通とるより早く呑みこみければ警吏等は今呑みたりし書類こそ慥に證據の書類なり夫れとり出せと云ふ間も無慘にもそりまきて娘を仆し組伏せて一人の巡査はいと大きなる手をば口の中へと入れつゝも引き出さんとあせれどもはや喉咽もとを下りしか更に手さはりなかりしかば猶奥までとざん酷にも腕さし入るゝほどもなく口はさけ咽喉は破れて血は淋漓何かは以て堪るべき霜夜の虫のそれならであはれ無常の夜嵐にはかなくも娘の息は絶えにけりこは死なしたり兎に角に役所にて解剖する外なしと警部の下知に呼子を吹けば何所に忍び居たるらん馬車一臺走せ着きたり警吏は死骸をその中に打込みつゝも一同に馬車をとばして役所へこそは歸りけれ跡に老父はあまりの事にあきれ果て唯忙然と夢に夢みる心地して待間ほどなく夜も明けて昨夜のさわぎは何事と見舞ふ隣家の人々老父の綑を解き放ちゆり搖かしつゝ問ひかくれば問はれて涙もろともにありし次第もあとや先とり亂だしてぞ物語れば皆人々も打驚きさほどの事のありと知らば又せんすべもありつらんにと打悔みしか其内に氣のきゝたる一人かくて居しとて何かせん役所に行きて模様をば問ひ合すこそ善かんめれと云へば一同尤もと同意をなせは彼の者は役所に至り小使に少しばかりの鼻藥與へて聞ば彼の娘解剖されて其の咽喉より書類は出てたりとのみ外には様子も知れざれば歸りて此の由物語るに皆人々も可愛の娘御平生愼みよき上に親孝行なりしものをと涙ながらに惜めば誠

に老父は堪へ兼て氣絶なせしが皆人にいたはられて幸によみ歸りしもその後は明けくれ娘の事のみを口ばしりつゝ寢食をなさねば一家は暗となり遂にほどなく此の世を去りぬとか跡にて樣子尋ねしに娘は警吏を强盜と思ひあやまり兼てより貯へ置きし百圓紙幣賊に與へてかなはじと呑み込みたる者にして別に虛無黨への隱謀に關係などはせざりしも其の云ひなつけの少年に虛無黨ありしまでにして巡査を指揮せし警部こそ戀のかなはぬ遺恨を以て娘をも連類の一人と申立てたるよりして事玆に至りしとかやこのあはれ無慘の物語りは魯國の人より聞きし人の話をまた聞きしたるものなれば多少の間違もありぬべけれど然し暴惡なる行政ことに不法不正の警察のため家内の安全家庭の幸福を打破られて事實あるの點には間違なかるべしこれにつけても我國にかゝる怪事の無きは誠に有難くも幸にも有けり思ふに又かゝるいまはしき事の末々までなき事をこそ願ふなれ

三戸野山の幽居

身幾度か逆境に置かれ、限りなき世の殘虐にさいなまれながら、從容事に處して能く其進退を誤らざりしもの、細川忠興の夫人明智氏の如き今古稀に見る所なり。

彼女の父光秀が一旦其主織田信長を弑するや、彼女は謀叛人の女なるを以て斥けられて三戸野の山中に幽せられしが、光秀の山崎に敗死するに及びて、侍臣等皆彼女に自殺を勸めぬ。

彼女言く、『自害して身を潔ふするは好し、去れど良人の命なきに死するは貞操の道にあらざらむ』と。

峰の松風、簷端の時雨、彼女は此の淋しき山中に、限りなき苦艱を忍びつゝ、彼女の良人が秀吉の命により

て彼女を家に呼び迎ふるまで、彼女は久しく此處に止まりぬ。

繪畫

畫學の栞（一）

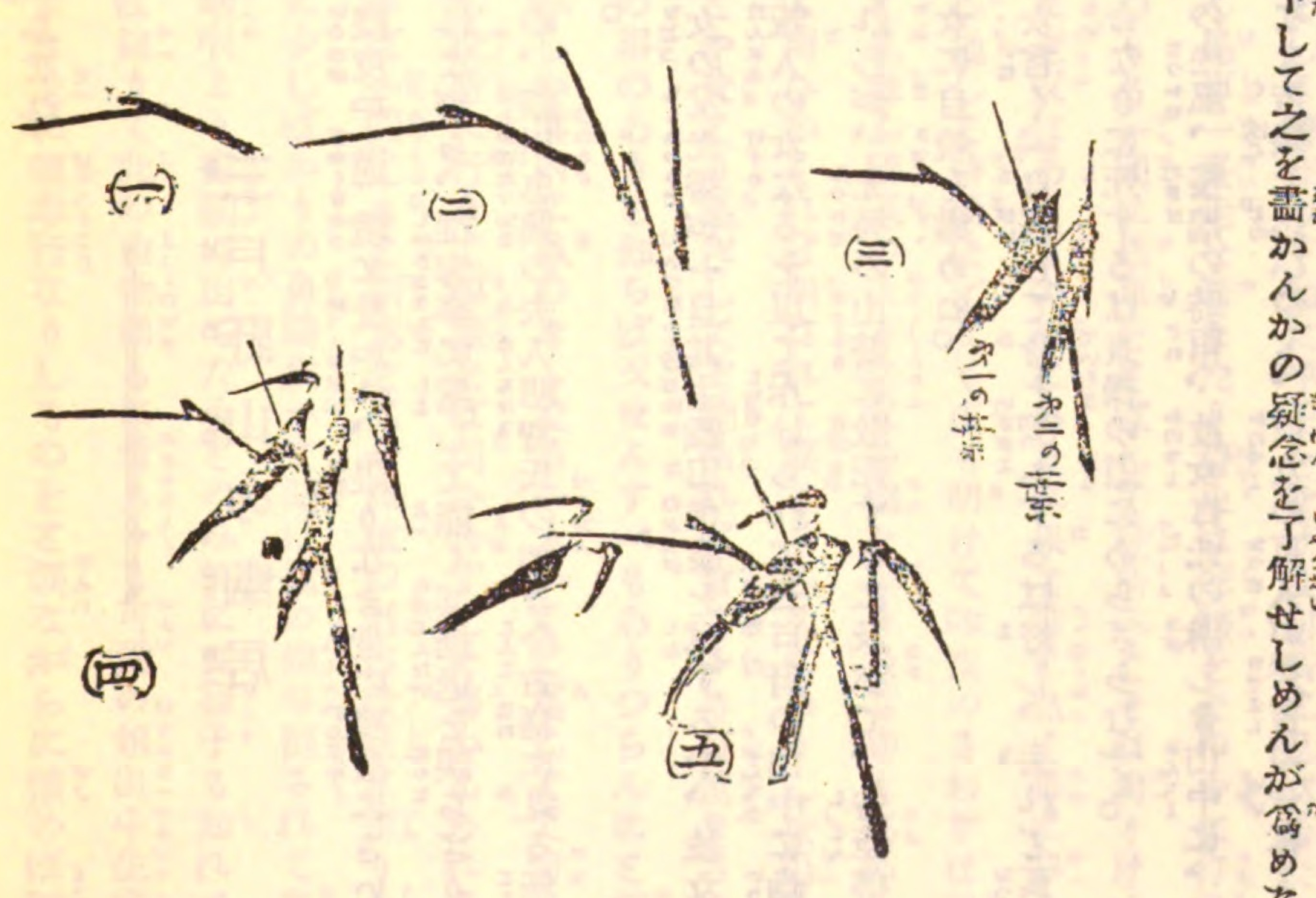
金仙

家庭に於ける繪畫の用は今更言ふまでもなし、今之が獨り學びの簡易法を述べて、世の師に乏しき人に便りすべし、

＊　＊　＊　＊

畫に就きてのむつかしき議論は且つ措き、單に筆子の用法手腕の練熟法を示さんに、

こゝに圖するは減筆の竹なり、運筆の順序を假りに符號を以てあらはしたれば、其一二の符號に從ひ筆を下すべし、畫にもと順序なしと雖、初心の者何れより筆を下して之を畫かんかの疑念を了解せしめんが爲めなり、



（一）は即ち竹の枝にて、筆法は先の方よりへの字なりに畫く、

（二）も同じく竹の枝なり、これも前の如く上の方より畫くべし、

（三）は竹の葉にして、筆を横に太く上より下に活潑におろし、其返し筆を第二の葉となす、

（四）も竹葉即ち添へ葉なり、

（五）も同じく新葉、即ち竹の添へ葉なり、之れにて簡略なる竹の畫は完了せり、最も位置即ち恰好に注意す可し、今若し第四或は第五の添へ葉何れか一つ除きても其竹の畫の見惡き事を知る可し、故に何物に限らず其位置の尤も整へる樣に心がく可し、

因に記す、繪を畫く前に筆の扱ひ方最も肝要なり、夫れは畫に就て墨色を出さしむる爲めなり、硯をよく掃除し、墨を濃くすりし後、畫筆或は心なしの太き筆を水にひたし、能く洗ひて水氣を中央口にて吸ひ取り、前の濃き墨を先の方に附け、試皿とて一枚の白き皿にて墨の加減を試み、然る後竹の葉或は他の何者によらず畫くなり、さすれば墨の色面白く紙面に顯はれ、濃き處と淡き處とを見る可し、

無聲詩話

（十）

雪舟は小田氏字は等揚、備中赤濱の人なり、楊知濱叉備溪齋と號す。幼にして佛弟子となり、州の寳福寺にありしが、畫を好みて經を讀まず、壯なるに及びて京師相國寺の洪德禪師に從ひ鎌倉建長寺の玉隱永璵を師として禪を學べり。

其畫は如拙周文を師とし、寛正中明に行きて數年を留まり、天童山に參禪して第一座を占め、當時明國第一の大畫家たる張氏李氏の畫を見て學ぶに足ずとなし、

各地を跋渉して勝景山川を探りぬ。其筆秀勁にして氣格悠然、淋漓たるの中自ら神來の幽致あり。靜中の動、動中の靜、一點一畫も竟ひに是れ精神ありて存せり。

二絶の景を畫くや、碩儒膽仲和上に題して『巨嶂稜層鎮海涯、扶桑堪作上天梯、岩寒六月常留雪、勢似青蓮直過氏、名刹雲連淸廸古、虚堂塵遠老禪栖、乘風吾欲東遊去、新到松原窮羽衣』と云ひしと云ふ。

彼は又好んで馬牛人物の減筆畫を作りしが、其畫を作るや、香を焚き、茶を喫し、簫を吹き、詩を吟じ、興來り神旺して便ち筆を下しゝとなん。

蓋じ彼は日本畫家中の一巨人なり。



人となり謙退にして清貧自ら居り、自然を友として、自適逍遙し、以て其の七十七年の生を永正三年に終りぬ。

其明に在るの日、曾て我富士山下三保の一望清見瀉の

家政

西洋音樂の心得

何れの女學校を見るも、西洋の音樂のなき處はなし。

小學校にても西洋風の音樂を敎しへ、幼稚園にても之を敎へ、殊に音樂學校等にては、之を專門に敎ゆるありて、西洋音樂はもはや全國に行き渡れり。之と共にその心得を知るは、目下必要の事たり。

音樂始めの年齡

從來の日本の音樂は、小さき者ほど覺へよしとて、未だ琴三味線に手の達どかず、舌の自由に廻らざる五ッ六ッの時分より、無理に捕へて之を敎ゆる習なれども、女子の聲の開發は餘り早くより始むべからず。その身躰の構造成熟して、自然が音樂の用意をなせし時を見計らいて、之を始むべし。元よりオルガン、バイオリン等の器械を弄するは、人の好嗜に任せる七八歲より始むるも可なれども、聲を慣らすは十四歲を以て適當の時とす。西洋器械も種々あれど、或る有名なる音樂者の說に由れば、バイオリンは最も耳を慣れしめ、音聲を正しく出だしむるが故に、幼童のためには最良の器械なりと云へり。そは何れにしてもよけれども、一の注意すべきは學ぶ人の時間の制限なり。

時間の制限

一時に餘り長く稽古せしむるは、大に害あり。こは年齡の多少に由らず、練習の高下に由らず、音樂を學ばん人は、終始注意すべき問題なり。歌を稽古せんとする人々は、半時間每に暫らく休みて、一日中長くも二三時より多く聲を用ゆべからず。樂器を弄する人も、一時間にして休むべし。殊にその休みし間は、室內にて靜かに運動をなすか、靜かに讀書を爲すべし。走り廻りて手の振ぶが好きとは、心して避くべし。面白きにまきれし、長く歌い、一度喉を害するとならば、再び廻復すべからず。

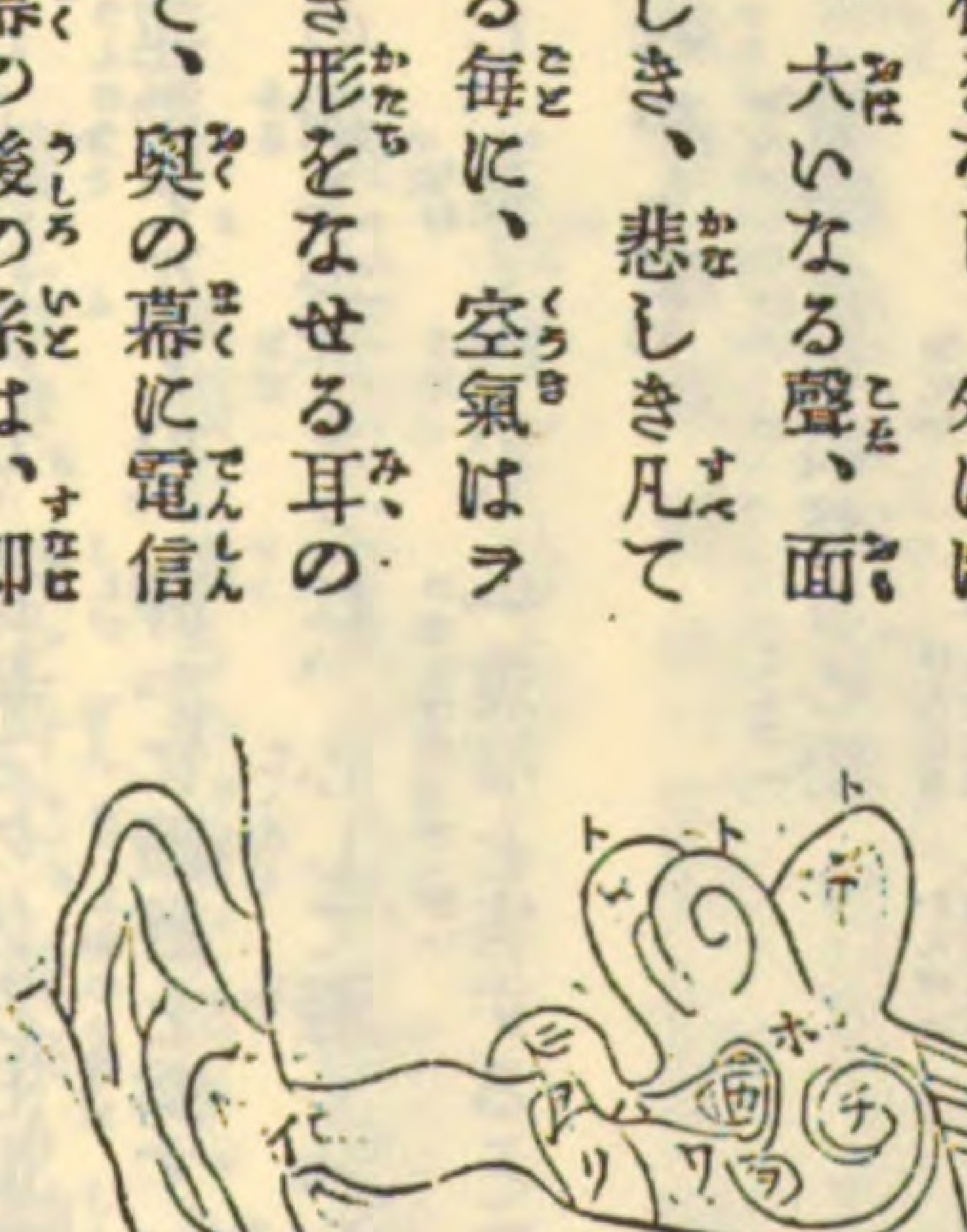
音樂會に出づる心得

聲の良しあしは、大にその健康に關係あり。壯健なる人は强壯なる聲を出だし。虛弱なる人は虛弱なる聲

を出だす。されば眞の音樂者は、常に食物等に注意なすと云ふが、少なくとも音樂會若しくは學校の集會等にて、群集の前に歌はんとする時は、食事のすぐ後か或は空腹の時等は、良き聲を出たす能わず。成るべく空腹ならず、滿腹ならず。良き加減の時を見計らふべし。又た歌の前には茶、コーヒー等の興奮物は成るべく避くるを可しとす。音樂專門家のためには、種々注意すべき事もあれど、通常の學生にても、一通は心得をくことそよけれ。

體中の音樂室

眼を寫眞室と云へば、耳は體中の音樂室なり。我等が耳垢を取る時、簪を入るゝ處は外耳とて、耳の中にては、最も外部にある室にして、室の突當りたる處に薄き幕あり。その奥に細き糸の如き神系幾本となく筋を延きて、恰かもピヤノの糸の如き樣をなし、外には小さき音、大いなる聲、面白きおかしき、悲しき凡ての音のする毎に、空氣はラッパの如き形をなせる耳の中に入りて、奥の幕に電信を傳ゆ。幕の後の糸は、即



ちその震動を受けて、震いながら之を腦に傳ゆ。かくて腦は之を聞き分くるなり。もしその糸が損し破ることあらば、倘ほピヤノ、バイオリンの糸の切れたる如く、耳は用を爲さゝるに至るべし。若し目が日中の皇帝ならば、耳は夜間の女王と云ふべし。目は明かるき處にあらざれば支配力を及ぼす能はざれども、耳は暗夜一點の星の光もなくして、能くその用を爲す。目は一つの單純なる室にして、光を直接に受くる樣に作ら

れたるが、耳は數個の室ありて、或は廻りくねりたるトンネルの如きもの、或は岩の胴穴の如きもの、或は横さまなる廊下の如きものありて、其狀恰も城中の隱れ所にあらざれば、暗らき牢獄の如き狀をなせり。もし心が不注意なるか、不公平ならば、明かなる寫眞室をば度々訪問して、暗黑なる牢屋の如き音樂室へは、不音なるともあるべけれど、公平なる心は、注意深かき夜番の如く、暗き所を等しく訪問して、外界よりの音信を大小となく己が所聞の財量にと、常に集めて歩るくなり。顏に具わる耳、目、口、鼻の內、口は元より生命の親にして、大切なれども、之に次ぐものは耳ならんか。目盲にて賢きものは少なからず。塙保己一の如き賢こき人は、別者とするも、凡て目なきものは物に悟くして、覺るとも亦た速かなり。鼻なくしても愚とはならず。去れども耳なきものに極つて、愚かなるもの〵多きは、我等が日常實見せる處なり。かくまで大切なる耳の構造を知りて、之が發生の法等に心を用ゆるは、如何にも大切なる事柄ならずや。

第一圖は耳の中を示せり。圖中(ヘ)の處は耳輪とて、我等が友人と顏を見合すとき、顏の兩傍に木耳の如き形をなして、我等の話聲を何時にても、聞き集めて(イ)の聽道に送らんと待ち構ゆる處にして、(イ)と(ヘ)の處を外耳と云ふ。聽道の突當りには鼓膜とて、大鼓の如く張つめたる(リ)の皮ありて『これより先は音聲の外一物も入るを禁んずと』と云はん計りの顏付きに擴がりて待てり。これを外耳と中耳の境とす。中耳の中には、四個の小さき骨ありて、互に手を繫ぎ、鼓膜の後にありて、常に來客の取り次ぎを爲せる。(ワ)の骨は槌骨とて、音聲がピク〳〵とかドン〳〵とか云つて鼓を打つとその槌骨は忠實に之を取り次ぎて(ニ)の鏈骨へ傳ふ。それより(ハ)の砧骨(ワ)の馬鐙骨(カ)の環骨は、それよりそれと知らせ合ひて、遂に

（ホ）の印圖窩を突く、（ホ）より先きは內耳とて、又た異りたる領地なり。內耳の中には（ト）（ト）（ト）の三半規管と云ふ骨と蝸牛虫の骨の如き（チ）の蝸牛殼と名くる骨と（ホ）の印圖窩と（ヌ）の圓窩とあり。耳がもし昔の我國の封建時代の如く、所々に關所を立てゝ通行をさし止むるとあるが、又領地々々の主人仝志が喧嘩を始むるとあらば、美しき鳥の聲も、愛らしき小供の聲も、所々にて打ち破わされ、めちや〳〵となりて遂に腦へは達せざらんも、親和せる各國帝王と、行き届きたる腦の支配力は、外界の事物の起る事に、少しの間違もなく少しの滯溜はりとなく、一々之を腦に傳達す、內耳の中はすべて液軆を以て充されたるが、先きの聲が順次に四小骨に波及して（ホ）の處に來るや、外に避け處なきが故に、その中の液軆を壓迫す。その液は又た壓され縮んで行き處なく（ヌ）の圓窩の中にあるゴムの如き彈性の膜をおす。さてそのおされながら行く先きは（ル）の神系にて、これぞ所謂ピヤノ室のピヤノの糸なり。その糸はピンとかドンとか聞きたる通りを腦に傳ふ。かくて日々の出來事は本社の新聞紙上に明白に記載せらるゝなり。

談し變つて（ロ）の處はオイスタキウス管とて口中に通ずる小さき空筒なり。我等が大ひなる欠厭等をなす時、耳の奥がズン――と音して、恰も頭の中へ空氣が入り込みしが如き感じの起る事あるは、全くその管の入り口より欠厭の時空氣の入りたるなり。この管は中耳の領中に屬するものにて、常に外界の空氣と平均を保つ樣に作られたればなり。

耳は聖人の敎への聲、慈善家のめぐみの聲、無邪氣なる小供の笑ひ聲を聞くと同時に、片輪者の啼き聲、監獄囚徒の叫び聲、乞食の物乞ひ聲を傳ふ。その聞くと聞かざるは、我等の意志にあり。善人は善事を聞く事

多く、悪人は常に悪事に耳をかたぶく。耳より入る事物の善し悪しは、人を善くも又た悪しくもするなり。殊に小供が母の言によつてその性質を造るに關係あるは、驚くべき事實です。それのみならず耳を能く開きし者は、賢こくなり。之を閉さくものは愚となる。されば賢こくならんと欲する人は、耳を常に掃除して己が益になる事はもらさず之を聞き取るべし。

耳の中には細き毛ありて充てり。これは鼻の中の毛と同じく、外より塵等の進入するを防ぐものなれば、剃刀にて之を剃り落すは、大に害ある事なり。又た耳には耳垢とて黄味かゝりたる硫黄の塊の如きもの生ずるが、之れは餘りに捨てをかば、固着して聽く力を害するのみならず、耳鳴とて或は遠方にて鈴を鳴らすが如き音、或は大海に暴風の起りて波の荒るゝが如き音、或は山奥に猿の吠ゆるが如き聲、又は太鼓の音、歌の聲等の如き種々の音を生じ、頭痛の出でゝ苦しむ事あり。耳鳴は時に頭中の血液の動搖によりて起る事あり。或は聽神系の一部、風邪のために止るによりて生ずる事あり。殊に小供の長久齒の生ずる時、大人に智慧齒の生ずる時に、大痛を發し、熱を起す事あり。或は腫物の生じ、又は木の子の生じて痛甚だしきものありて、その養生の道を心得をく事は必要なれども、こゝは養生法を記るすべき處にあらざるが故に、之を除ぶく。たゞかゝる時には早く醫者の診察を受け、賢こくなるの道を失なはざる事を務むべし。殊に注意すべきは、耳穴を掃除する時、奧の皮膜を破らざるにあり、他の病は大凡は醫すべけれども、皮膜を破りて聾となりたる者は、如何なる醫者の手にすらも再び醫すべからずと云ふ。又た虚弱小供は時に耳だれとて、耳垢の溶けたる樣になりて流れ出づる事あり、これは腦病の兆しにて、捨をかば時に生命に關する事あり。くれぐ\も小さき一の音樂室に注意して、ピヤノの破損

せざる樣、適當なる掃除と修繕に心がくべきこと。

賞與のよしあし

小供が親の命に能く隨ひし時賞めるに過ぐるは、過を爲せしを強く叱り過ぐると同じく、敎育の道にあらざるなり、元より適當に賞めて勵ましむるは、善きとなるが、賞與として物品を與ふるの良非は、一の問題なり。物品は賞詞の如くならで、喜ぶとも大にして、その喜びを記憶するとも長がければ、その點より云ば之を與ふるは一利あるとながら、利に伴なふ害の又た大なるを思はざるべからず。善は利益のための爲すにあらず、善は賞與のために爲すにあらず、たとひ欲せざる時も、賞與の受けられたる時も、將たそれによりて身の損となる時も、善は爲すべきが故に、なすと云ふとなり、強く習わしむると大に肝要なり。之を爲すには賞を與ふるは、反つて害あれば或は之を與へて勵まし或は詞を以て勵まし、或は義務を以て勸め、凡て中庸を取るべし。

小供に賄賂を使ふの害

「孃はいゝ子だから、之をしたら菓子をあげる」これ何れの家にも、度々出で易き賄賂の一なり。この賄賂を度々使ふ家を見るに、夜、眠りの時の來りしに、小供の尙ほ遊ばんとを欲する時、藥を與へんとして飮ざる時、氷砂糖の一塊か金米糖の一粒なくしては、忽ち大騷ぎ起り、每日の事に啼くや怒るの大騷動を生じ。これ止むを得ざる結果なり。親よりして賄賂の稽古をなさしめ、然る後之を怒るも已に遲そし。子供は車の如く廻す人の方角に向つて、西にも東にも廻るべければ、子供の惡しき方に走るは、親の敎か惡しきに由ると知るべし。

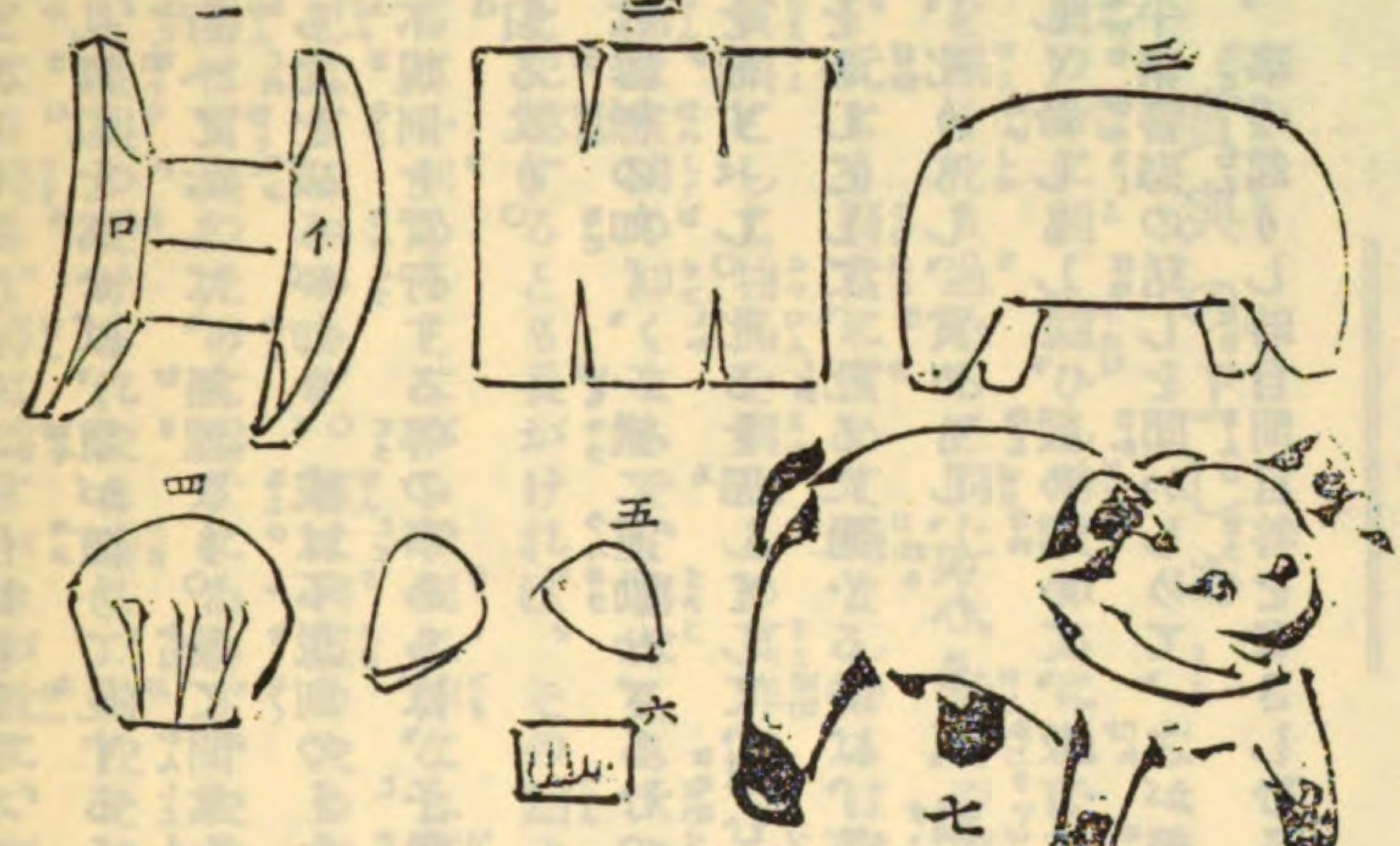
殊に注意すべきかど〳〵

建たる法律を自分にて破る程おかしきはなし。おかしきはまだしもなれども、子供は親を手本として、萬事親に見眞似を爲せば、親が破りて見するとは、子供に之を行へと云ふは、無理なり。兼て間食を子供に禁じて自ら之を破るが如き、或は不規則のとを正ながら、自ら不規則を實行する等の事あらば、子供は直ちに之を眞似るなり。

子供は器械の如く、一樣に運動せざるむつかしき動物なるを記すべし。叱るを悪しとして、慰むるに過ぎ、賞むるをわしとして、叱るに過ぐる時は、等しき過失を生ず、叱りもし、賞めもし、笑ひもし、勸めもし、時には嚴しく命しもして、緩め矯めて、敎育すべし。殊とさら平素善悪の話しを聞かしめて、之が善悪を區別せしめ、事の起りし時自問自答をなさしむるに便にすべし。

安全なる小供のおもちや

一二才の小供は、未だ高尚なる仕かけの弄物はわからずして面白味なく、通常の、豆大皷、槌などは餘りに有りふれて、厭くが故に、手に取らず。さらばとて赤や青にて美しく色取りたる弄物は、口に入るゝの恐れありて與ふるを得ず。燒きものゝは齒にて食欠くの心配あり、紙は涎にて破るが故によからず。一として適當なるおもちやなきには人々の困る處なり。圖に示せるはフランネルにて作りたる犬にして、中は綿をつめたれば、過て人を打つも痛たき事なく、嚙みて齒を損するの恐なく、其上何れの小供にても犬や猫は非常に好むものにして之を與ふればワン〳〵ニヤア〳〵とて何時迄も飽かずして能く遊ぶが故に、弄物としては最も適當のものなり。作り方は第一圖の如く、少しく細そく、長き切れの四隅を切り、第二圖の如く四隅の切りたる處を以て四足を作り、眞中を以て胴を作り、

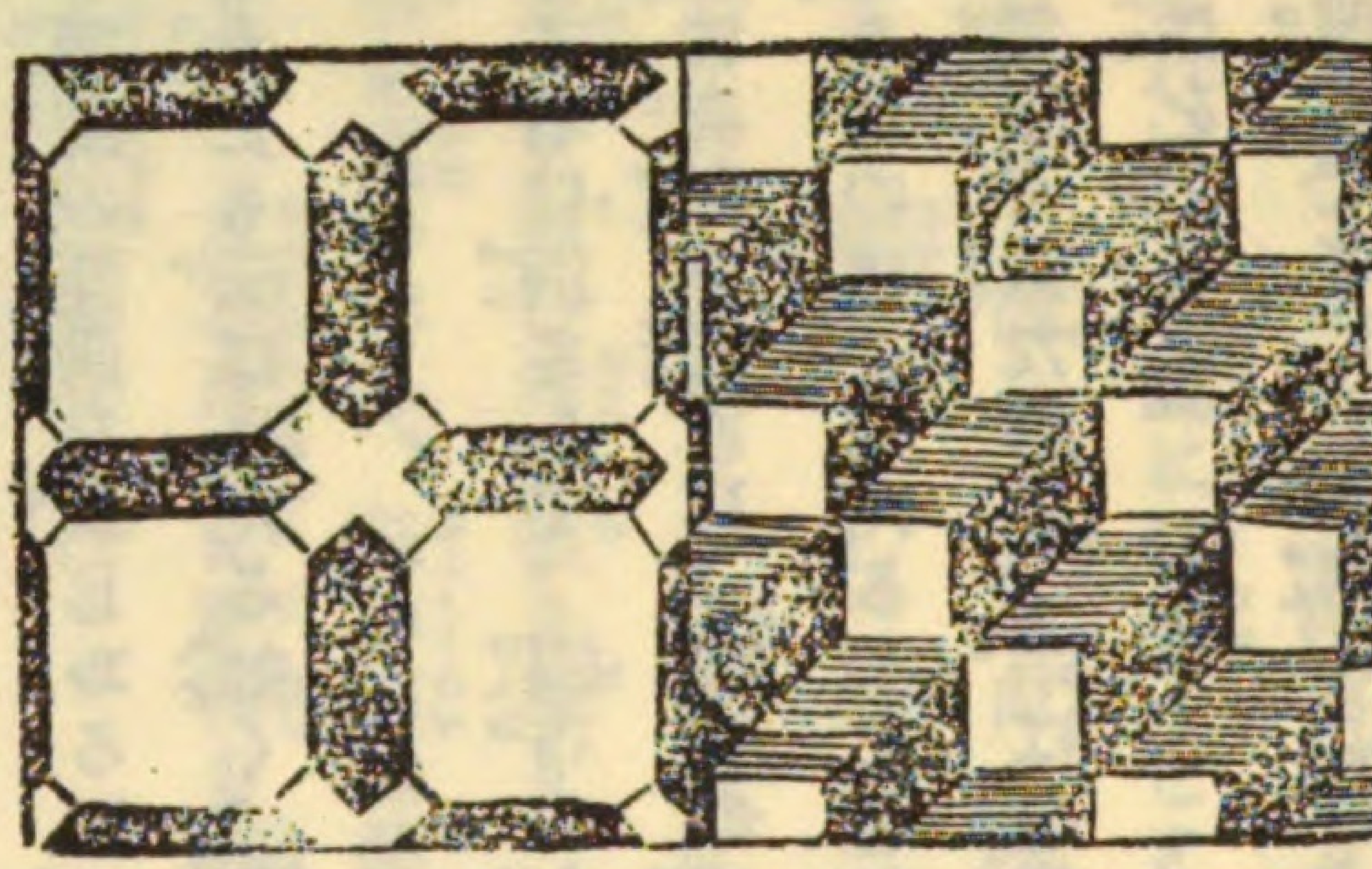


裏返しイロの處より綿を入れば、三圖の如くなる。之に人形等の頭を作る如く、丸く切りたる切に綿を入れて四圖の如きものを作り、五圖の如き耳になる切と、六圖の如き口になる切とを着くれば、七圖の如き愛らしき犬を得べし。之に足の先き尾等を黒き毛糸にて付け、目は縫ひ付くるか、又は玉を着くべし。耳と口の切は、共に黒きを可とし。首環の切れは赤きを美とす。この仕方にて猫、鼠、蛙、人形、何にても好みのものを作り得べし注意は綿を成るべく堅くつめ込むにあり。

美事なる坐ぶとん

過る日二三の友人と或る家に招かれて行きけるに、椅子の左に美しき色の、四角なる木とも、箱とも解らざるもの幾個ともなく積みたるを掛けたり。餘り美しく餘り不思議なれば、近きて見るに、これ切にて作りた

る椅子掛けなり。之れは坐ぶとんになさば實用になりて、且かんと思へり。作り方は別にむづかしきにあらず。黄と黒との切を一圖の如く縫ひ合せたるなり。その美しさは作りし上ならでは味ひ難たし。一見せば箱を積みたるに異ならず。餘りに美しければ玆に記しぬ。又た二圖の如くなせば更に新らしきものを得べし。



第一　　第二

紙袋

穀物又は種物等を貯藏するに、往々虫害鼠害を蒙り、或は之を容れ置くもの丶破損し易く、或は取り扱ひに不便なるなど、幾多の困難を感ずるは農家の共に憂ふる所なるが、爰に一の紙袋あり、兵庫縣津名郡志筑町の西田茂八郎といへる人の發明のよし、强靱なる紙を以て之を製り、數年數度の使用に適し、又防虫藥を塗抹しあるを以て虫鼠の害をも防ぎ、持運びにも輕便なり、見本を要する人あらば郵劵二錢を送りて取寄せ見たまふべし、

運動の方法

やぎ生

牛乳、雞卵、肉類等の滋養物を、常に食したりとて、身躰は健康なるにあらず。若しこれを以て健康を得るとせむ乎、所謂中等以上の者は、壯健なるべき筈なれ

ども、却て中等以下の勞働者に、壯健の者ある也。何故に然る乎。適度の運動を爲しおるに外ならず、前の號に於て筑峰女史も云はれたる如く、養生は運動にある也。

勞働を職とする者は別として、絹布の衣服に身を裝ひ八疊の奥座敷に火鉢を友とし、書見が日々のつとめにて、箸より重きものは持ちたることなき殿樣方は、奮て運動を爲し健康を保たれよ、余は殿樣方に最適したる運動の方法を示さむ。

大弓は胸膈を開きてよし、擊劍もよし、躰操もよし、遠足もよし、然れども、これ等の運動法は、一人にて爲すよりは、數人にて爲したる方、更に慰も多く、隨つて一人都合よければ、一人は差支ある等、行ひ難き場合あり、しかのみならず、擊劍は烈しき運動なれば、過度に爲す能はず、且頭腦を打撻するは、あまり宜しくあるまじ、躰操も自ら號令を發して爲すときは、御務となりて慰もなし、遠足は足のみ勞れ、身躰に平均なる運動とは申し難し、然らば余の所謂運動の方法は如何なるものなるや。

曰く農業にある也。農業者には比較上壯健者あり、故に余は簡易なる一年中の農事を掲けて、其實行を促がさんとす。諸君は庭園の中を選び、多くして十坪、少くとも三坪位の地を耕して畠と爲し、一月には『やつがしら』の苗を八百屋より買ひ來りて、一尺隔て位に一株づゝ植へ、水を散布し、二三日間は朝夕水を與へ、一週日計りを經なば、生枯の判別もつくにより、それよりは時々小便に水を半分位交へたる肥料を與ふべし、斯くて取上る迄に二回は作を斷て根を固むべし、二月の末には最早蕾出つべければ、之れを見なば摘みとりて、花の出つる力を殺き葉の方へ向け、適度を見計ひて取上べし。跡地へは二尺位の距離に徑五寸計りの穴を穿ち、待ち肥とて矢張小便に水を加へたるもの

を注ぎ、五六日程經て茄子胡瓜の苗を植付べし、茄子は根の腐くを忌むものなれば、根に藁の類を布き、旱の時には水を注ぐべし、又幹の倒れぬ樣は棒をたて之に結びつくべし、胡瓜は植付て後一尺程になりたる時一回芽を摘み、蔓のからむやうに高さ一間ばかりの墻を作るべし、茄子も胡瓜も肥料は小便にて澤山なり、然し利を得んとて爲さんには、種々の方法あれども、皆六ヶ敷ことなれば、此處には省くことゝせむ。茄子胡瓜の終る頃は暑さも薄らぎ秋に向ふべし。此時は畑の全面を耕して土を細末になし、蕪、三河島の類を蒔付べし、芽生じなば、込みたる處を抜き取りて、薄き小便をかけ、長じて込む毎に抜き取り、區畫を正しくして作を斷り根を固むべし、三四回は是非とも作を斷らねばならぬなり、又其度毎に肥料を與へ、而して十二月の末は取上の好期なるべし。

以上は最簡易なる一年中の農事也。之れを試みなば、知らず識らず運動となり、清淨なる空氣を呼吸し、且其樂みに至りては、植へたるもの丶日々に長大となり、或は實を結ぶを朝夕に見るは如何に愉快ならむ、別に作物取上帳を製し採取したるもの丶統計を爲さば、僅々たる土地にして、豫想外の巨額に上るを知らむ、更に此野菜が細君の手によりて調理せられ膳に上るとき、自ら勞力を加へたるものと思へば、一層美味を感ずるなるべし

コーヒーの作り方とその効用

我國にては食後にもお茶、退屈の時にもお茶、來客にもお茶、話にもお茶と茶を矢たらに用ゆるの慣習あるなり、コーヒーは外國の茶なりとて、之れもやたらに用ゆるの癖なれど、こは恐ろしき事なり。コーヒーは適宜に用ゆれば、萬病の藥と迄は行かずとも、十病位

の藥にはなるべけれども、無暗に用ゆる時は、又た甚たしき害あり。

今は何處の田舍にてもこれを得べけれども、始めはトルコの一商人が、ロンドンの片らにて小さきコーヒー店を始めけるが、その後だん〳〵と盛になり來りしに、チャールス二世の時、コーヒーは一切販賣するを得ずとの法律を出し給へり。こは之を飲むの結果により、帝王に向つて謀反を企つるもの多しとの故を以てなりき。コーヒーは非常の刺激劑にて、多く飲む時は頭痛を起し、或は狂氣じみたる徵兆を顯はす事ありて害あるかわりには、又た大に功用あり。第一亞片アルコールのために魔睡せられしとき、純粹にして混せもののなき碎きたるコーヒーを、每二十分每に一オンスづゝを用ゆれば、魔睡を回復せしむべし。第二キナインの如き苦き藥を飲む時に、コーヒーに混ずればその苦が味を少なくして、大に飮み安かるべし。第三之を適宜に用ゆる時は、腦と神系に著るしき好結果を顯すが故に、飲料としては茶よりも大に益ある事、第四菜食の癖あるもの、若しくは肉食を爲す能はざる地位に居る人、殊に貧民等には强きコーヒーの一杯づゝを用ゆれば、マラリヤ熱を未發に防ぐの功あり。第四新らしきコーヒーに熱湯をそゝぎ(沸騰せしめず)その絞り汁に牛乳を混じて病人に少しづゝ與ふれば、又た滋養あり。

コーヒーは新らしき者程を良しとするが故に、成るべくは自宅にて作るを良とするが、もし大なるうすのなき時は、一時に澤山を煎り置かざるを良しとす。又た煎りたる果は、ブリキの器に入れて、堅く口をとざすべし。西洋人は多くは果のまゝに求めて、自宅にて之を製す。或る人はチコレイとてコーヒーよりも安價なる果實を以て之に換ゆるとあり。これは少しは害なきも、澤山用ゆれば害あり。チコレーはコーヒーよりは少しく苦がくして、色黑きを以て知る可し。安す米に

南京米を混ずる如く、度々他の果實を以てコーヒーに混ずるとあり。時に有害のものあれば、安すきコーヒーは漫りに飲用すべからず。又たコーヒーは製したるものよりは生にて買ふ方數倍の安價なれば、經濟の上より云ふも、自宅にて製するを益ありとす之を製するには生のコーヒーを取りて少しのバタと砂糖の入りたる入れ物の内に入れ、豆を煎るが如にして微火にていり、狐色になりて香はしき臭のするを相圖に火より取り下して碓にてくだく也。

製したるコーヒーを飲用するに、所の風儀種々あれども、フランスはその術に最も長じたりと云ふ。其製り方は、別に難き業にてはなし。一人毎に大サジ一杯、即ち半オンスの割合にて、コーヒーを金巾の袋に入れ、之を通常用ゆるコーヒーを製る中子のある器の中子の上に上せ、其上より三四サジの熱湯を濺て、コーヒーのジタく\濕ふ丈となし、十五分より廿分計の間靜に置き、さて出してその上より澤山の熱湯をそゝぎ、下にたまりたる汁を、コップに濺ぎ、牛乳を半若しくば三倍計り入れ角砂糖の二個も加へて、味はゞ、實にその味日本の茶にも勝りて、美はしき方云わん方なし。

手輕なる支那、西洋、日本料理

雛の腸づめ(西洋料理)

生れて五六ヶ月なる雛の、雛の羽未だ全く延びず、肉柔かなる時分、其羽を去り、腸を抜き取り、殘りたる細き毛は火にて燒き、頭を切り離し、能く水にて洗ひ、足は熱湯の中に入れば皮離るるを、脊にくゝり付け、さて別に葱を小さく刻みて、燒鍋にて燒き、之にぱんの粉と鹽とを混ぜて、雛の腸につめ、燒き焙りて肉汁を掛けて食す。肉汁は牛肉一片に水五合計り入れ煮つめ、その二合計りになりたるものを用ゆべし。

鶩の油煮（西洋料理）

鶩の肉を小さくきりて、鍋にて燒き、之に葱の細さく刻みたるものと、胡椒及び鹽とを入れて、酢にいたし、別に温飩粉を熱つき湯にて解き、牛酪少し計りと、雞卵の白味少しとを入れたるものゝ中へ、先きの燒き肉と葱とを酢より引き上げて、共に混じ、之を沸騰したる油鍋の中に入れて、鳶色になりたる時引き揚ぐべし。

浮　龜（支那料理）

長芋の皮を剝ぎ、好く洗ひて山葵おろしにておろし、其中へ寒晒の粉と、魚もしくは鳥の摺身を入れ、鹽砂糖を加へて、一寸蒸し、固りたる處を龜の形に斬り、背に當る處に庖丁を入れて、龜甲の形を作り、胡麻油にて揚ぐれば、香ばしくしてめづらしき一皿を得べし。

金　鷄（支那料理）

豆腐を袋に入れて、水を絞ぼり、能く摺りつぶし、葛と鷄卵の黄味と、小量の鹽砂糖とを入れ、美濃紙の上へ延し、蒸籠にてむし、上りたる時胡麻の油にて揚げて食用とす。

南京豆腐（支那料理）

南京豆の皮を去り、摺鉢にて能く摺り、南京豆一升に葛五合、水二升の割合にて、摺りつぶし、之をふるいにてこし、鍋にて煮つめ、その中に銀杏、木耳、人參等を交ぜて、暫らく冷ましをき、丸めて油にて揚ぐるなり。

マンドーズ（支那料理）

鯛、平目、若しくは鯉、こち、の如き餘り油の強くなき魚の摺り身を、蒲鉾等よりは少しく和らかめに摺り、之に鷄卵、温飩粉、銀杏、麻の實、椎茸、平麩、きくらげ、人參、牛房なとを、細かに刻みて入れ、能く混じて、青竹の中に入れて蒸し燒きにす。青竹は太き物を撰み、兩方に節を殘し、二ッに割り湯にて能く洗らひ、その中へ先摺り混ぜし物を入れて、二つを合せ、

之を蒸籠にて蒸せば、丸きものとなる、之を如何様にも切りて用ゆべし。

二汁七菜（日本料理）

生盛には、あかゞひ、うど、さば、きその實付き之に煮かへし酢を用ひ、汁には志ひたけ、菜、白魚を用ひ、坪皿には鯉焼目付き、ふ、ぎんなんを用ひ、二の膳の刺味は鯛のへき作り、かぶら、うど、わさびを用ひ、汁にはむすび鱚、いそみつば、引て猪口は、くるま海老、ふきのとう、ねぎみそ。吸物はあわ雪、玉子のうしを、平皿はかものたゝき身、筍、茶碗は蒸鯛、岩たけ、せりせうがを、敷みそにして用ゆべし。右の内泡雪、玉子と云ふは、玉子の白味計りを茶筅にて泡を立てゝ一さじつゝ、うしほの中に入るゝなり。鯛のへき作りとは、鯛を三まいにをろし、肉ばかりをみそに一夜つけたるなり。

日用品物價

◎白米（一圓に付）●一等米九升二合●二等米九升四合●三等米九升六合●四等米一斗一合●五等米一斗五合

◎雜穀 ●本場平豆一斗六升●川越碗豆一斗六升五合●鶉隠元豆一斗四升五合●吉原大豆一斗七升五合●本貫大麥三斗一升●脇場大麥三斗二升五合●裸麥二斗二升五合●相州小麥一斗七升●船橋小麥一斗八升三合●常州小麥一斗八升八合●下總小麥一斗八升八合●千葉小麥一斗八升八合●入札竹林麥一斗六升三合並一斗八升四合●上割麥一斗八升並〇二斗〇〇●肥後上小麥一斗八升四合●室蘭小豆一斗二升七合●中手小豆一斗四升五合●本場達摩金時一斗三升●銚子隠元九升〇●庄内平谷一斗七升五合

◎鹽 赤穂七俵九分●大鹽井に八家四俵〇●本齋五俵八分（品なし）●新齋六俵九分

◎肥し物 九十中羽粕四貫四百目●内海粕本場中羽粕四貫目●樽前粕上四貫五百目●同中四貫八百目●厚岸粕上四貫七百目●同中五貫目●鯡粕極上四貫五百目●同中四貫六百目●地廻粕上四貫六百目●同次五貫目内外●南部粕四貫二百目●寒引干鰯二杯八合見當

◎糠 越中羽糠十二貫五百目●赤糠上銘七分三厘●金上々銘七分七厘●攝州白糠一俵〇八厘●金上八軒物一俵一分●兵庫羽糠十六貫ゟ十八貫

◎油粕類●本貫種粕一枚六分●本貫胡麻粕一枚六分●荏粕一枚九分



雜録

遺珠顆々

改革　ウアレース

社會の改良を始めんには王宮に行かんよりも先づ貧民の窟に入れ

幸福　エピクテータス

人若し不幸ならば是れ自家の過なる可し何となれば上帝は渾ての人を幸福ならしめんが爲めに造り玉へり

故人　セルデン

友は舊きを以て最も好しとす王慧姆(ゼームス)は常に云へり古き靴を持來れと古き靴尤もよく足に適すればなり

二種の養育法

無一生

二人の姉と妹とがありまして各自に一人ヅヽ息子を有ツて居ましたが偖其養育法にはお月樣と鼈程の相違でありました一方の甘太郎の母親は心弱いで諾々と小兒の言ふなり放題になつて種々な物品を山ほど與へまして而して撫で擦ッて甚く可愛がりました種々な甘いお菓子はムれ直の高い手遊物はムれ稲背な着類はムれドシ／＼甘太郎に當がひました一方の日出生の方は打見は躾方が嚴い樣ですから甘太郎ハ母親の眼からは酷い樣に見えましやうが其中に筋道の立ッた眞の慈愛が籠ッて居ます甘太郎は榮太郎の甘納豆や藤村の羊かんやなんぞうんとこさと有ッて居ました甘太郎は手遊物を庫に入れるほど澤山有ッて居まして新規なのと取替へると云ふ誤樂があるので時々には手遊物を破毀して遊ンで居ました甘太郎は其名の如く始末に終えない甘ッたれ小僧でありました霜が降りる時候となれば膝頭まである絹の靴襪でなくッては穿きませんでした手巾や着物には香水を呉れました新らしい靴や綺麗な着物を欲しがりました彼樣にして育ちました揚句の果には如何なに成行きましたらう甘太郎は酷い風邪を引込

みまして鼻は眞赤になり兩方の眼から眵が流れ出で兩方の耳短穗は脹れ上りました甘太郎は甘い砂糖のお菓子のために胃病を起こしました齒は一躰に丁子の樣に黑くなりました甘太郎は萬事に厭ッぽくなりました甘太郎は氣六ヶ敷屈詫勝に泣虫に不活潑に不健康に而して馬鹿になりましたが偖日出生の方は如何なりましたらう日出生は物の不足に慣れて居ました其遊方も躰力を附ける樣に遊びました食物は質素にして滋養になるもの計り食べました朝は眼が覺るが否や直に寢床から飛起き素直でダヽを揑ねないで眞實で勉强で善い兒でありました日出生の身躰が健康な樣に日出生の精神も健康でありました日出生が彼樣に育ちましたので母親は此上なく嬉しく幸福でありました日出生は小兒仲間の摸範になりました而して後には善良有用な成人になりました

柔弱な敎育樣をすれば何ンにもならぬ木偶人が出來ます國家の爲めになる人物を養成せんには雄々しい嚴い敎育を施すに限ります

談叢

一基の石

凝香潔操信女。彼女の露花香しき顔容と勁松潔き貞烈とを表せる此の六字を刻し住めたる一基の石は、西筑紫の旅にさすろふ人が始めて九州鐵道の滊車に駕し門司より博多に向へる途上名にし負ふ赤間のステーシヨンにて下車しつゝ七八町を行かば則ち遠く北の方日本海の天より落つる風に吹かれて彼石を見るべしと云ふ。

願ふに此石は其昔懷ばしき誰が爲の紀念として殘れるものぞ。彼女は嘗て山陽賴家の兒に歌はれて一たび世に知られつるものなりき。

今も尙榮へりとなん聞く赤間驛の大黑屋に松尾七兵衞と云へるがありき。彼は驛の富豪として釀酒を生業となし樂しき此日を過ごしける。

彼が家に花嫁として來りし一婦人は、彼が爲に一女を產みし後早く世に亡人となりき。再び亡き彼女の座に代て坐すべく來りし彼女も一女を擧げたる後一歲ばかりなるに亦亡人の數に入りき。女の名は前なるもの千代、後なるもの政。

政は甫めて二歲にして母に別れ、四歲にして父に別れぬ。

父臨終の際に遺命しけるは、『嘉右衞門と云へるを養子として之に姉娘なる千代を妻はせ、妹政は成人の後本家七左衞門の二子長次郎に嫁すべし』と。親戚乃ち嘉右衞門を養子として迎へ入れ、妹なる小さき彼女は其をさなきの故を以て嘉右衞門夫妻の娘分として育てられける。

彼女は其後年十一になりける時、容儀を見做ふべく福岡の士明石久左衞門の家に小間使として送られぬ。明石は好學の士なりき。

彼は靜慧なる彼女を見ていたく之を喜び、行儀作法より物讀み習ふ事までいと懇に敎へ、又爲に三烈婦傳とて袈裟及び細川忠興の夫人などの事を記せる書を作りて之を授けゝるとなん。

去れば彼女は其行の正しきと容顏の美はしきとを以て世に高く噂され、『明石殿の丁鬟』てふ名は一藩中にいひはやさるゝに至りぬ。春風彌生の盛りの花、彼女が十有八年の春は明石の家を見舞ひける。

一日人ありて故鄕より來れり、言ふ『暇を得て家に歸るべし』。

彼女は思ひき、『さては本家への緣組みなるべし、思ひ設けし事とはいへ、嬉しくも亦耻づかしく、今更胸のみとゞろかる』と。

斯くて彼女が住みならひつる明石が家を辭して、稚な遊びの其昔懷ばるゝ故鄕の赤間なる家へ歸りけるに、ありし昔に引かへて、我家のみかは本家まで、災禍續きて、當時の榮華夢の如し。春風堪ㇾ賞還堪ㇾ恨、纔見ニ開花ㇾ又落花。

盛衰榮枯は世のならひにして、天人も猶五衰の日に逢ふと聞けば、身の浮沈を驚くとにはあらざれども、彼女の心に期せしと事變り、彼女が今呼び返されたるは、其花嫁として本家なる長次郎に歸がんが爲にあらすして、同じ宗像の郡勝浦村の永島半五郎と呼べる大庄屋の兄に嫁せんが爲なりき。

姉の夫妻は零落したる其家よりして、近鄕に隱れなき富豪の家の新婦となるべき彼女の未來を深く喜こびしなり。

去れども彼女は此の喜ばしき報知を聞くを毫も喜ばざりき。否、彼女は此を以て世に最も物憂き事となしたりき。

『人生炎暑に就くの燕子にあらざらんよりは、父がいまはの遺言といひ、いひなづけの夫も目前にあるを、爭で貧しき彼が境涯を見棄て富有の人に身を寄んや。たとへ其前途は如何に辛酸なる生涯を以て鎖ざゝるゝにもせよ、一旦契りたる人に添ひ遂げてこそ女子の道は立つべけれ』と。彼女は實に此くの如く思ひ定めたり。

彼女の決心は動かざりき。姉の夫妻を始めとして彼女が新たなる婚嫁を勸めたる人々も今は之を思ひ止まるべくなりき。而して大庄屋が懇請の意は彼女が此のしほらしき決心を聞くに及びていやまさりき。

赤間邊の大庄屋などの重き人々は、彼女を其家の新婦となさんと欲する他の大庄屋の爲に、公然の婚意を彼女の家に通じぬ。且つ脅迫して言ふ『此婚を辭しなば、家の後難測るべからず』と。

嘉右衛門夫妻は驚きに携れて彼女に之を承諾せしむべく約せり。

ア、彼女は竟に何如なるべきぞ。

『往ん乎、父の遺命に背きていひなづけの夫を棄るを奈何せん。往かざらん乎、恩義ある姉夫妻の身上にふりかゝるべき禍難を奈何せん』。進退こゝに谷まりし彼女は衣引きかつぎて打臥し、只涙にかきくれて飲まず食はず髮も理めさりしこと數日なり。姉夫妻爲に深く心を痛ましめて彼女は看守り居ける。

或る朝彼女は枕輕げに起き出でり。而して姉に向て微笑つゝ言ふやう、『妾は實に過ちたりき、願くは今より心を翻して御心に從ひまゐらすべし』と。

秋風霜白き朝のながめも、思ひかへせば豈樂しからずとせんや。又も心の變らぬうち、善事は急ぐに若くは莫しと、笑顔を開ける人々打集ひて彼女の爲に彼女の新たなる結縁をことほぎける。

宴終りぬ。千秋萬歳の聲收まりぬ。

之を久ふして劈く如き驚きの叫びは裡なる納屋に於て姉の聲として叫ばれたり。

人相集りて之を見れば、うつ臥したる彼女は正坐して其手膝上にあり、雪の肌を紅の血盥に染めなしたる其吭元には遺されて一握の鋭き庖刀止まりき。彼女は已に其清らかなる雙眼を閉ぢて再び何事をも言はずありける。

享和元年十一月九日、生年十八歳、色深き櫨紅葉散りて跡寂たり。

書置の事

一筆申殘しまゐらせ候。我身そもじさまへ言なづけの事は申もくどく候へども、此頃おしてかつら（勝浦）へ參れとの事にて、すでに日柄もきはまり、今更かなしさやる方なく、昨日も人してとゝさまかゝさま（姉夫妻）へことわり申上候へども、一圓御聞入なく

挿てたのみ候人までかつらへ参るを本意とすゝめられ、そもじさまへそへとの事は申入無レ之候。夫に付一しほそもじさま御身の上御痛はしく、我身ひとり道ならぬ緣を結び身に錦をよそほひ候とも、世の人はさぞかし我身を義理しらずとうとんじ可レ申候。又此内とゝさまのそもじさまと不義せしとの御しかり、御尤なる御疑ひながら、御情に預り候事は無ニ御座一候。只々言ひなづけの義理にひかれ、又先立給ふたがひの親樣へ申譯、かれと云ひ、これと云ひ、一方ならぬかなしさに自害をとげ申候。かしく。

十一月九日　　まさ

長次郎樣へ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

譚搜子曰く『其行の果して中道を得たるや否やは今暫く問はざる所なり。然れども其志氣の貞潔芳烈にして而も凜々乎たる、豈亦愛すべからざらんや。封縣武俠の時代は、實に彼女の如きものを以て、之が理想の婦人となしき』。

時事一斑

梅花先春

天皇『梅花先春』を歌ひて斯くのたまへり、

春風も吹くこゝちして、新玉の
年の初日に匂ふ梅かな。

皇后和し給ふ、

さしのぼる朝日のとけき大庭に、
春もまちあへすにほふ梅哉。

君子の爭

世は總撰擧準備の時代となれり。全國到る處は將に一大競爭の場とならんとす。競爭は則ち可なり、只君子の爭をなすを要す。

演劇流行

演劇流行の徴漸く顯はる。幾多の小脚本家まさに世に出でんと欲するもの﹅如し。

寄書

家庭に於ける科學

成堂學人

進步とは何ぞ、人間の領地が次第に自然の版圖を侵蝕するの謂にあらずや。而してかの鐵と電氣とを把て時間の野に健鬪する一種の動物が着々自然の威武を征伏して其領土を擴むるは今の世の傾向なり。故に今の世は科學を以て萬象を解釋するの時代にして、科學の手は、實に人間をして鐵と電氣とを把握せしむるものなり。水の流るゝ、火の燃ゆる、人の生くる、人の死する、家屋の打建てらるゝ、橋梁の架せらるゝ、天地萬物の此くの如くして存する、皆是れ其然る所以の理在て然るものにして、而して其然る所以を知るは、人生の樂事なり、又其特樾なり。此の特樾を利用し此の樂事を樂むは、人間の世に存する目的の一にあらずや。即ち科學を研究し之を應用するは人間の生存を助くる所以にあらずや。

而して科學と云へば何となく六かしきが如くに聞ゆ。然れども其六かしきものは固より六かしかるべしと雖、其六かしからざるものに至ては、日常坐臥食飲の事然らざるは莫し。有機の物、無機の物、一草一木、悉く其資料のみ。科學は進步のしるしなり。故に科學の進步を謀るは即ち民人の進步を謀る所以にして、從來詩歌的感想に富みて理性に短なる我が國民の如きは、最も之を須要とする所となす。而して之が根底を家庭に於て養ふことは、其須要とする中の最も須要とする所なるべし。福澤諭吉氏が嘗て極めて卑近に且つ面白く物理を說を以て世を敎へしものゝ、如何に多く當時を益したりしかを思へば、吾人は家庭科學の今日に於ても愉快と實益とを以て猶世に歡迎せらるべきを信ず。否歡迎せらるべからざるを信ず。かの兒童の好奇心を喜ばしめ、幷せて其智識を開發すること、世にこれより優りたるものは少なかるべし。家庭科學の用豈一にして足らんや。吾人は今の世の學者が速に此の幾多の家庭科學書を作り、而して世の家庭が速に之を採用して、極めて愉快に極めて實益多き、この平易卑近なる教育に從事せんことをこれ切望するに堪へざるなり。



家庭雜誌

〇毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

〇廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

〇本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純朗

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可